
茜色の君に恋をする

ぷんにゃご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茜色の君に恋をする

【Nコード】

N8580X

【作者名】

ぷんにゃこ

【あらすじ】

孤独な娘、羽山優菜は小学校教師となつて、かつて暮らした街に帰ってきた。そこで昔彼女をいじめていた同級生、冬木志郎と再会する。教師として真摯に子供たちと向き合おうとする優菜。そして、そんな優菜に近づこうとする志郎。地方の街と小学校を舞台に、幼馴染みの二人の関係はどんな風にな変わってゆくのか……。

この作品は、以前拙サイトで「茜色は君の色」と言うタイトルで掲載していたものを加筆・改稿しながら再掲載しています。

1. プロローグ 雨上がりの別れ

羽山優菜^{はやまゆうな}は俗に言う、いじめられっ子だった。

小学六年の女子として、別にのろまなだったり不潔だったりした訳でもなく、頭はむしろ良いほうだったし、運動もまあまあ出来た。目鼻立ちは目立つ方ではなかったが、端正な造作はむしろ美しいとさえ言える子供だった。普通ならばいじめられる要素はない。だがいじめの理由など、その多くが些細なきっかけから始まるのである。羽山優菜の場合は貧しさだった。ボシカテイであったり、セイカツホゴだのシュウガクエンジョだのという、大人達の話聞きかじったおませな女子生徒が、どうやらそれが世間的にいいものではないらしいと勝手に思い込み、友人同士で噂している内に誰かが「貧乏人は無視しよう」とか言い出し、それからのことだった。

当時の田舎の小学生にとって、その属するコミュニティから締め出されると言う事がどんなにつらいことか、当事者になってみると分らない。

いじめを仕掛けてくるのは主に女の子で、遊びの仲間に入れないとか、持ち物をバカにするとか、一つ一つは地味だが、徒党を組む為陰湿である。男子はもつとおおっぴらに「ビンボー」等とからかった。そして彼等の精神的支柱となっているのは、クラスのリーダー、冬木志郎^{ふゆきしろう}だった。

志郎の家は駅前の大きな酒屋で、祖父は県会議員をしている旧家であった。親戚は造り酒屋も営んでいて、立派な家に住んでいた。体も大きく、勉強も運動も人並み以上にできて誰からも一目おかれる存在であったが、どういわけか優菜は志郎にひどく嫌われていた。クラスの皆は志郎が優菜を嫌っていると思い込んでいたし、志郎自身も優菜を目の前にして「こんなネクラな奴！」と口に出すこともあった。

だが、優菜が泣いたところを見た者はいなかったし、学校を休んだりもしなかった。だが、そのことが一層いじめに拍車をかけたことも事実だった。

彼等の街は大きな市街地まで特急でトンネルを越えて30分、田園風景が広がり、奈良時代の遺跡が多く点在するベッドタウンだった。大きなスーパーも進出し、都会から私立の有名校も移転してきたから、これからますます発展していきそうだったが、昔からそこに住む人々の意識は良くも悪くも保守的な気風が残る。

その街はそう言うところだった。

優奈が五年生の一二月。街に初めてできたキリスト教会で、クリスマスに地区の小学生の子供たちをクリスマス会に招待すると言う行事があった。田舎にしては珍しく、本格的な西洋の香りが漂うクリスマス会に子供たちはワクワクしながら教会に集まった。

イエス様の生涯の話や、賛美歌を2曲ほど教えてもらった後は、

いよいよお楽しみのパーティーである。

教会は木材をふんだんに使った懐古的な建物で、机や椅子を隅にどけた大きな部屋に本物の樅もみの木のツリーが立てられている。それだけでも珍しいのに、銀色の付け髭を輝かせて大きな外国人のサンタクロースが現れるとパーティーは最高潮で、小さい子も大きな子も歓声を上げてサンタに群がった。

サンタは皆にサテンのリボンで結んだ可愛らしいプレゼントの包みを配り歩き、シスターたちはにこしながら大きなケーキを切り分けた。ケーキを配るのは大きな子供の役割で、指名された志郎はきびきびと皿を配って回る。

パーティーには優菜も来ていた。

志郎は小さい学年の子供から順にケーキを配ってゆく。やがて自分の学年に配り始めた時、皆の期待に満ちた眼が自分を取り囲んでいるのに気が付いた。優菜は一番最後の席に大人しく座っている。目立たないように、静かに視線を落として。

ケーキはぴったり皆に行き渡るように切り分けられていた。これだけの大きさと数のケーキ焼くのはさぞかし大変な作業だったろう。だが、子ども達の瞳の輝きをみて、シスターたちはとても嬉しそうだった。

志郎はいよいよ高学年の一団にケーキを配りはじめた。順に直接手渡してゆく。優菜の近くに座る女子たちは好奇心いっぱい志郎を見つめていた。その中にははつきりとした挑発の意思が読み取れた。そして、志郎はその意味を正確に理解した。

最後のケーキを優菜の前に持っていったとき、彼はわざとよろけ、皿からケーキを落とした。ケーキは優菜の目の前を通過し、膝をかすめ、床にぼつてりとひしゃがる。

「あつ！ ああ……あ……あ」

志朗はおどけて見せる。

「あ……ダメじゃん、志郎君」

「もったいない、ケーキ、可愛いぞー」

たちまち女子たちが非難じみた声を上げる。しかし、その中にはかなりの割合で嘲弄ちょうろうが混じっていた。

優菜は足元の無残なケーキを見つめている。そして、ゆっくり顔を上げた。

志郎と目が合った時、大きく見開かれたその瞳は虚ろで、別に何者をも映してはいなかった。それが志郎を恐ろしく怯ひるませる。

「な、なんだよ。よろめいただけだろ、睨にらむんじゃねえよ。おつかねえ」

わざとらしい志郎のいい訳に答えは無い。

「あらあら」

気が付いたシスターが慌てて近づいてくる。しかし優菜はそちらを見ようとせず、床に落ちたケーキを拾い上げて汚れた床をハン

カチで拭いた。そして、まっすぐゴミ箱に向かって歩いてケーキを捨てると、そのまますたと部屋から出て行った。

その様子はいかにも自然だった。まるで要らなくなった皿を洗ってきますとでも言うように。だから誰も後を追わず、何も言わなかったが、勿論優菜は二度と戻ってはこなかった。

「……あの子出ていっちゃった……」

「ちょっとかわいそうじゃない？」

ケーキを頬張りながら女の子たちが囁き合っている。

「……でも、いてもしゃべんないしウザイしさぁ……。ねえ、志郎君？」

志郎は何も答えなかった。ただおいしそうなケーキの味がさっぱりわからなくなっただけで。

そんな事があってから、ますます志郎は優菜を毛嫌いするようになった。言葉でからかうと目立つ自分が不利になるため、馬鹿にした表情で無視をするという姑息な手に出た。クラスの皆はそれを志郎が優菜を嫌っているからだとしごくまっとうに解釈し、やがて優菜に挨拶するものすらいなくなった。

見かねた担任が、幾度か学級会で話をして、優菜にも何度か声をかけてくれたようだが、とりあえず無視される以外はほとんど何もされるわけなく、当の優菜があまりにも無反応な為、あまり効果

はなかったようだ。志郎も様子を尋ねられたが、巧妙に切り抜けた。担任の女教師は気が優しく、確たる現場も押さえていないのに、あからさまに注意ができない。志郎はそのあたりのこともちゃんと承知していた。ただ、自分が卑怯なことをしている感覚は時々心の隅をよぎったが、無理やりそれを押さえつけた。

羽山優菜はこの小学校に四年生の途中で転校してきた生徒だった。

学年の途中で転校して来るだけでも割合珍しいのに、少しイントネーションの違う喋り方や、その神秘的——とは言い過ぎかもしれないが、少し冷めたような、妙に悟ったような雰囲気のおかげで、最初から皆にしっくり溶け込めたとは言い難かったのは確かだ。

それでも最初のうちは二クラスしか無いこの学年でも、しゃべり合う友人はいたようだったし、優菜も自分から仲間外れにされるような事をしてはいなかった筈だ。志郎も何度か口をきいた事がある。

四年生の冬、彼女が転校してきてしばらくたった頃の事だ。

「おまえ……なんで髪くらないんだ？ うつとおしくないんか？」

休み時間にその長い髪を見て志郎は尋ねた。

「別に？ この方が好きだから……ラプンツェルみたいで。」

「……？」

らぶんつえーるがなんなのか、彼にはさっぱりわからなかったが、当時の女子はほとんど短い髪型にしていたし、長めの子も大概くくるか、三つ編みにしていたから、優菜のおろした髪は目立つな、と志郎は思った。

そういえばいじめが始まったのも、彼女が唯一、自己主張をするかのように下ろしていたその髪が背中の半ばを過ぎた、四年生の終わりの頃からだったように思う。

ごく緩やかにウェーブを描くその髪はひどく美しく、志郎は時々こっそり眺めていた。

一度席替えて偶然、志郎の前の座席に優菜が座った事があり、教室の前の部分を大きく開けて先生が理科の実験を見せていた事があった。

ぎゅうぎゅうと詰まった座席に大きな体で窮屈そうに座っていた志郎がふと手元に眼をやると、優菜の髪が自分の机まで流れているのに気が付いた。

それは窓からの光を密やかに反射し、黒色なのに色々な色が交じり合っているように見えた。

「引つ張らないで！」

トゲのある声が頭の上から聞こえ、はっと気が付いた志郎は、自分が優菜の髪の一房を握ってしげしげ眺めている事を知った。

「あ……」

そんなつもりはなかったのに、初めて優菜がキツイ口のきき方をしたことに志郎はかなり狼狽した。指を離れた髪は微かな香りを放ちながら、音もなくノートの上にこぼれる。

「だって、お前の髪の毛が邪魔でノートがみえねえんだよ！」

動揺を隠すかのように言い放った声は、思いのほか大きく、クラスの皆が自分に注目している。志郎の顔に血が上った。

「うっとおしいぞ！ もっと前行けよ！」

優菜は黙って席を前にずらし、豊かな髪はほとんど椅子の背に落ちた。クラスがひそひそとざわめいている。

その時、教師がやんわりと注意を与え、その時はそれで収まったのだが、志郎が優菜を目の敵にし始めたのはその頃からだったようだ。志郎の態度の変化は知らず知らずクラスの皆にも影響を及ぼしていくことになる。

やがて学年が上がるにつれ、徐々に小賢しくなった彼等は、優菜が当時、振り込み制ではなかった給食費の納入にたびたび遅れたり、参観日に誰も来ないなどと言うことに気が付き始め、五年生の半ばを過ぎる頃には彼女は完全に孤立していたのであった。

しかし、どれだけ無視をされ、グループ学習のメンバーから一人外されても、優菜は無口でよく勉強し、長い髪を揺らしていた。

六年生の秋には遠足の代わりに修学旅行がある。夏休み前からクラスの皆様はワクワクし、二学期になってから事前学習をしたり、夕食のアンケートを取ったりと計画を練っていて、後二週間で待ちに待った旅行の日という頃。

優菜は突然学校に来なくなった。

最初の二日ほどは皆、ただの欠席だと思って皆気にしなかった。だが考えてみれば、今まで優菜はどんなに苛められても学校を休んだ事がなかったので、奇妙と言えば奇妙なことだったのだが。

次の日も優菜は登校せず、四日目になると、クラス中がヒソヒソと噂をし始めた。

「……ちょっとヤバくない？」

「えー、私らのせいだって言うの？」

「関係ないじゃん、口きかなかったただけでさあ」

「そろそろ先生が何か言いますよ。もうすぐ修学旅行だったのに、つまらない学活で時間とられんのいやだよねえ。どっかの班活動に

入れてやりなよ」

「ウチは七人でもう一杯だから。そっちは六人でしょ」

「ええ、あんな暗い子いやだあ。せつかく楽しみにしてんのにさあ」

そんな女子のおしゃべりを聞きたび、志郎はなんともいえない苛立ちを感じた。

授業中幾度も前列の空席に目が行き、どうして先生は何も言わないんだろつと怪しんだ。

その日の夕方。

朝から降っていた雨はすっかり上がり、秋の夕暮れにふさわしい、すばらしい夕焼けが刈り取られた田んぼを照らしていた。そばを走る古い国道を、使いに出された志郎は自転車で走っていた。

田んぼの奥に小学校が見える。校門から伸びる一本の地道を羽山優菜がひとりで歩いていた。ぬかるんだ道を意識してのことだろう、傘は持っていないかったが、赤い雨靴を履いているのがわかる。

志郎は思わずそちらへとハンドルをきった。田の縁を縫うような

畦道に幾つも水溜りができ、夕焼け空を映している。赤く染まった水溜りを乱暴に破壊しながらペダルをこいだ。

後ろから近づいてくる自転車の気配に優菜は振り返った。

「おい」

自転車から降りもせず、志郎はぶっきらぼうに声をかける。

「……」

「なんで、学校来ないんだ？ 病気でも無いのに」

答えず、優菜は穏やかに志郎を見上げる。夕日に真正面から照らされて、優菜の体全体がオレンジ色に輝き、黒髪がツヤやかな栗色に見えた。

「サボリかよ？」

「……関係ないでしょう？」

投げやりな声。その瞳は遠くの空へ向けられ、志郎等、映していない。

その一言に志郎はカツとなった。それがどういう事なのか考える間もなく、言葉が勝手に口から飛び出す。

「関係ないけどな、俺には！ だけどお前がサボっている間、皆迷惑してんだ。お前がいらないから修学旅行の班とか、班別行動がちつとも決まらないってな！」

「……まるで私がない事がとっても大事なように聞こえるね」

「！」

その言葉はひやりと志郎の胸を刺した。優菜がこんな事を言い返すとは、思いもしなかったのだ。ぐうつと言葉に詰まる。

「冬木君」

静かに優菜は志郎の名を呼んだ。

「なっ……なんだよ！」

「さようなら」

優菜が背を向け、長い髪がふわりと舞った。赤い雨靴がぬかるんだ地道を踏む度にぐちゅぐちゅと音が鳴り、小さな背中が遠ざかっていく。

大人っぽい態度と子供らしい仕草の不思議な調和。そんなものを語れるほど志郎は言葉に長けてはいなかったが、自分が優菜に圧倒され、本当に言いたかったことの最初の言葉すら伝えられなかったことは自覚できた。

学校に来いよ。

次の日も優菜は学校に来なかった。

志郎は昨日のことを思い出しながら、担任が朝の学活をしに教室に入ってくるのをぼんやりと眺め、気の抜けた声で号令をかけた。

「きりいゝっ……れえい」

ガタガタガタ。皆が席につく。

「おはようございます。はじめにお知らせがあります。休んでいた羽山優菜さんが、転校することになりました」

「！」

級友たちがひそひそと顔を見合し、中には志郎に話しかける者もいる。だが、志郎は誰の声も聞いてはいなかった。

「みんな静かに。……実は羽山さんのお母さんは一昨日亡くなられたのです。そして羽山さんは、お葬式を済ませて親類の家に行く事になったそうです。昨日、学校に挨拶に来て、皆さんには会えないけれどよろしく、そして、修学旅行を楽しんでくださいと伝言を貰いました。……残念ですが、羽山さんにとってはよかったかもしれせん」

最後の一言はきつとクラスの皆に対する先生の皮肉だろう。自分の大きな心音を聞きながら、志郎はそんな風を感じた。

普通こんな田舎の町では葬式は重要な行事で、近所なら手伝いに行ったり、役持ちの家は受付に借り出されたりとけっこう大騒ぎなる。それが子供とはいえ、何も気がつかなかったということは如何に付き合いの少なかった家とはいえ、何か不自然な匂いがした。後になって聞いたことだが、実際は親戚の意向で儀式らしいものはほとんど行われず、優菜の母はひっそりと役場で火葬にふされたらしい。

『さようなら』

昨日、優菜が言った事はきつとこのことだったのだと、志郎は今更ながらに思いあたった。あれは学校に転校のことを告げに来た帰り道だったのだ。たった一人で。

サボリだなんて、無慈悲な自分の言葉を優菜はどのように聞いていたのだろうか？

母親を亡くしたなんて、どのような心持がするんだろうか？

このクラスに、そして自分に、優菜はなんのいい思い出も無いはずだった。親戚の家に行くことになって今頃ほっとしているのだろうか？

ざわめいたクラスの中で彼だけが凍りついたように動かなかった。

もう確かめようも無い。

行つて欲しくはなかったのに。

やっと素直な気持ち心が心の中で言葉の形を取った。昨日夕日に染ま^るった小さな背中に感じたのと同じ思い。

何事もなかったかのように一時間目の授業が始まる。

窓の外には昨日優菜が歩き去った道がまっすぐに田んぼの中に伸びていた。

1・プロローグ 雨上がりの別れ (後書き)

次項は10年後の予定です。

2・再会はトワイライトブルー 1 (前書き)

前回から十年後です。

2・再会はトワイライトブルー 1

またここに戻って来たんだわ……。

優菜は校門を出たところで振り返り、夕日に照らされた校舎を見上げた。くすんだコンクリートがばら色に染まっている。様々な手続きは既に昨日、市の役場にて済ませ、今日は赴任の挨拶に母校へやってきたのだ。春休みの夕暮れの校舎には子ども達の姿は無く、職員の姿も少ない。

はつきり言つてこの学校にいい思い出などなかった。もともと、良くも悪くも思い出に耽^{ふけ}る余裕もなく、ひたすら生きる為に生きてきたこの年月。この街を思い出す事など無く。

それでもこの地は優菜にとって特別な意味がある場所なのだ。暮らしたのはわずか数年。しかし、ここで母が亡くなった。学校から帰ってみると玄関の上がりかまちで母が倒れており、そのまま病院で歸らぬ人となった。あれは六年生の秋の事。それから直ぐに優菜はこの街を去った。最後の日はきれいな夕焼けで、校舎が真っ赤に染まっていた事を覚えている。

ふと、かつてのさざめきが鮮やかに蘇る。

教室、廊下、窓窓窓。そこかしこで子ども達は笑い合い、軽い足

音を響かせながら駆けまわっていた。そして自分もその中にいたのだった。校舎はほば元のままだし、きれいになったプールも嘗ての場所にある。確かにここは自分の母校なのだった。

なにを感傷に浸っているの？ 私らしくもない。

優菜は少し普通の子どもとは違っていたのだろう。幼い頃から母子家庭で育った彼女は、余り沢山のコミュニケーション手段を持たなかったのだ。特に右へ倣え^{なら}式の女の子特有の群れる感覚が苦手だった。別に孤高を気取るつもりも無かったのだが、同じ持ち物も揃えられなかった所為もあって、いつも少し離れて本を読んでいた。そんな彼女をクラスメイト達は子ども独特の感覚で無視をしたり、時にはあからさまに馬鹿にしたりしたのだった。それに対して、おびえて泣いてあげればよかったのだろうが、どっちみちここに住み着くわけじゃないと適当にあしらひ、彼等が期待するような反応も見せなかったものだから、よけい苛められたような気がする。

でも、こうして教師となってここに帰ってきたからには、少なくとも自分のような子どもを作らないようにしなくては、とも思う。せつかく難関の採用試験を突破し、こうして就職できた限りにおいで。

私は教師になったのだから。

明日から不動産屋に行つて借りれる部屋を探さなくてはならないだろう。元いた長屋はとつくの昔になくなっていたし、母を亡くしたそんなところに住むつもりもない。部屋探しは慣れている。幼い頃から各地を転々とし、自分の家という物を持ったことの無い優菜

にとって、それは別に特別なことではなかった。

とり合えず、このまま駅にとって返し、買い物でもして今住んでいる隣の部屋に帰り、遅い夕食でも整える以外にする事がなくなった。それでいい。明日から忙しくなるだろうから。優菜はゆっくりと来た道を引き返す。

校門から伸びる一本道はかつては広い地道であつたが、今ではアスファルトが敷かれ、路肩にガードレールも設置されている。しかし、両側の田んぼはまだ健在で、その間を縫うように水路と畦道が走っている。向うには小高い丘が黒くなくずんでいる。確か史跡に指定されている筈だ。のどかさはまだまだある。そうは言っても月日の流れは明らかで、建て売りと見られる住宅の群れが駅の方角から押し寄せてきていた。

ゆるく頬を撫でる風は昼頃は春の匂いを運んできていたが、日が落ちる寸前の今ではぴりりとした冷気を含んでいる。

優菜は長い影を引きながらゆっくりと歩いてゆく。

三月末日。春、未だ浅き夕暮れだった。

3・再会はトワイライトブルー 2

志郎は軽トラックのエンジンを止めて、小学校の校門にたたずむ
細い人影を振り返った。

人影はこちらに背を向けている。長い髪の若い女性であることだけはわかったが、空気には早春の靄もやがうつすらと含まれ、距離もあるため、誰かまでは判別できない。しかし、どこかで見た風景だと思った。

♪
♪
♪

その時、志郎の携帯が賑やかな音を立てた。車の音にかき消されないよう、音量は常に最大にしてある。常に得意先からの電話が頻繁にかかってくるからだ。急いで携帯を取りだすと画面には頼子よりこの名前が表示されていた。

頼子とは小、中学校の同級生で、付き合い始めたのは彼が大学を卒業して地元に戻り、家業を継いでからだ。現在でほぼ一年になる。

彼としてはせっかく都会の大学に行ったのだから、そつちで就職したい気持ちが強かったのだが、中々そんなわがままも許されない家柄だった。地元に戻った当初退屈していた志郎に声をかけたのは、

頼子の方からだった。

「俺。なに？ まだ配達中なんだ」

ややもすれば無愛想とも取れる口調で志郎は電話に出た。

『あ、そう？ ごめん。シロちゃん、今日会える？ 七時ごろならいけるかな？』

甘えるような、明るい声。いつもより少しだけ早口になっている。志郎の不機嫌を敏感に読みとったのだろう。

「なんで？ お前、残業だつて言つてなかったか？」

『うん、ちよつとム力つくことあつて、定時で上がるつもりなんだ。ねえ、ご飯食べようよ。せつかくの金曜日だし』

「腰掛OLの言いそうなことだよな。こつちは後五軒も配達あつて、最終は倉山田町まで行かなきゃなんねえんだぜ」

倉山田町とは国道沿いにある隣の町のことだ。駅から遠く、老人も多いので、車による配達手段が欠かせない町である。

「多分七時過ぎるぞ」

『いいよ。待つてる。終わったら連絡しようだい？』

「ああ、わかったよ……」

無愛想に切った携帯をベンチシートに放り出し、志郎はもう一度

窓の外に目を凝らした。黄昏はさらに濃くなり、人影は俯き加減に一本道をゆつくりと歩き出した所だった。

まさかな……

ばかばかしい感傷を振り払い、再びエンジンをかける。ぶるん、と小さなトラックはひと震えして、走り出した。ドアミラーに人影は赤い校舎を背に小さくなってゆく。

田端頼子は乱暴にロッカーを閉めて、廊下に出た。とたんに同僚の尾形里美^{りみ}に出会ってしまった。生真面目な彼女は今、頼子が最も出会いたくない相手だった。

「あれ？ 田端さん、帰るの？」

「帰るよ？ 帰っちゃ悪い？」

頼子は里美の目を見ないようにしてつつけんどんに答える。ここで大抵の人間はテキトウに答えてやり過ごすのだが、頼子のワガママで残業のあおりを食らってしまった里美は皮肉の一つも言いたい気分になっていた。

「まあね、田端さんに任せていちゃ、いつまでたっても見積書はで

きそうにないしね。でもさ、自分が二箇所も計算まちがいをしたんだから、いくら縁故就職でもあの態度はまずいよ。」

あの態度とは、ミスを指摘した三年先輩の同僚に口答えした挙句、今日は頭痛がするので帰りますと、相手の答えも待たずにオフィスを飛び出した事を指している。その見積書は至急扱いで、明日の朝一番で先方に届けなくてはならず、同輩の里美にお八チが回ってきってしまったのだ。里美の皮肉はここにある。他市からきた里美からすれば、地元出身で短大卒業後特に就職活動もせず、叔父の会社に勤めている頼子の事は、あまり好きになれない年下の同期だった。

「いいの！とにかく今日は頭がいたい。じゃ！」

ついさっきオフィスを飛び出したのとまったく同じ態度で、頼子は踵を返し、ちょうど止まったエレベーターに飛び乗った。

あゝ、うつとおしい。なんで誰も彼もこんなにうつとおしいのかしら？

さっきの志郎の電話の態度もよろしくなかったし、計算間違いを指摘した先輩も、わざわざ嫌味をいいに来た里美も憎らしい。五人乗りの小さなエレベーターにたまたま乗り合わせた違う会社の中年社員にすら苛立ちが募る。なにより、こんなにいらしている自分に一番腹が立った。

なにさ、シロちゃんなんて最近すっごいテキトウな態度だし。いくらお店を拡張するんで忙しいたって、彼女をないがしろにしているいいわけ？ 最初の頃はあんなに優しくかったのに……！

エレベーターが開くと頼子は後も見ずに、街路へと飛び出した。

地方都市とはいえ、一応県庁所在地であるこの街のメインストリートだ。金曜日の夕方のこと。人通りが多い。ここから私鉄で頼子の町まで二十分、六時前には家に帰れる。久しぶりにオシャレをして着飾って志郎を待とう。何ならもう一度こっちへ取って返して、最近できた洒落た居酒屋に繰り出すのもいい。そう決めると少し気分も晴れやかになるように思えた。

もうすぐ爛漫の春なのだから。

4・再会はトワイライトブルー 3

優菜が時計を見ると、既に六時を大きく過ぎ、春の宵が窓の外に広がっていた。明るい職員室から見れば、まだ山の端に残る夕陽も少し頼りないものに見える。

新学期が始まって一週間が経つ。今年度新規採用の優菜は、五年生三クラスの内、二組の担当となっていた。

大学を卒業して一年間、非常勤講師として二つの小学校をまわった優菜だったが、年度当初から学級の受け持ちは初めてだった。しかも、五年生という、そろそろ自我の目覚めに近づいた子ども達の担任は、まったく初めてだったので、いろいろと神経を使う事が多く、くたくたになった七日間だった。

始業式の日はずがにクラス替えしたてだし、新しい担任にも興味があつたしで、少しはおとなしくしていた子ども達だったが、次の日にはさっそく、本領を発揮してやりたい放題をしてくれた。

この一週間で、ずいぶん喉を痛め、声が枯れてしまったような気がする。学力的には昔も今もさほど悪い校区ではないが、普段の男子達の活発さは想像以上で、タン瘤、打ち身、擦過傷は日常茶飯事だった。

そして、ようやく週末だと思った今日、一人の男子児童が昼休みに階段の手すりを駆け下りると言う離れ業に挑戦と言う事件があった。彼は普通の元気な児童で、転がり落ちた弾みに目の上を切り、本人が驚くほどの血が出たので、保健室の養護教諭が公用車で近くの病院に搬送する騒ぎになった。

結果は大したことはなく、ボクサーのように目の上に強力なバンテージが貼られて帰ってきた。目と言う事で優菜は非常に心配したが、本人はケロリとしており、かえってハクがついたように威張っていた。放課後自宅に連絡した後、何を言われるかと戦々恐々で、教頭と共に児童を保護者宅まで送っていったのだが、昔は農家をしていたと言うその家の祖父がのしと出てくるなり「このバカもんが！」とゲンコツを孫にお見舞いし、せつかく立ち直っていたその男子が大泣きをする始末で、大いに狼狽させられた。

結局、彼の母親や祖母、そして奥にいた曾祖母まで出てきて迷惑をお掛けしましたとひたすら謝られ、とり合えず事なきを得た。

帰りの道中、教頭に「いい校区ですね」と優菜が言うと、教頭は確かにそうだが、昔堅気の人が多く、いい時はいいが、一旦こじれると中々信頼を取り戻せないと言った。

「見た感じが全てではありませんよ、羽山先生」

「それはそうですけれど……」

いじめられた経験のある優菜にはよく分かる理屈だ。

聞くと、新興住宅地に住む比較的若い夫婦達の子女と、昔ながらの住民の間に考え方の食い違いがあったり、あるいは、意思の疎通が

まったくないという、ベッドタウンにありがちな問題が矢張りあるらしい。

「本校の児童も多かれ少なかれ、そういった親たちの影響を受けるため、地の子と新興住宅地の子とでは、なんとなく雰囲気が違うんですよ」

まだ四十台の若い教頭は難しい顔をした。

それは何となく感じていたので優菜も頷く。そんな彼女に、教頭は、何か問題が起こり、対処の仕方によっては、親たちの攻撃の矛先がこちらに回って来る事もあるから気をつけなさいと重ねて言った。

言われなくとも優菜には充分心当たりがある。転校してきて、目立たないうちはよかったが、少し皆と違うことをしたり、言ったりしたらとたんに仲間外れにされた。自分は別に悪めだちするほうではなかったが、それでもすかしているだの、暗いだの散々陰口を叩かれたものだ。そんな気質が今でも続いているのだと、少し、げっそりした気分になる。

子どもの考えることなんて、基本的にそんなに変わったりしないのだわ……。ともあれ、今週を何とか乗り切ることができた。

職員室に戻ってきた優菜は、ほっと大きく息をついた。

「お疲れさん」

コーヒーを差し出したのは同じ学年の藤木だ。彼は三組の担任で、体育主任でもある青年教師である。

「初めは皆そうだよ。一生懸命なのはいいけど、力の抜きどころが掴めなくて、どっと疲れるんだ」

「そうですよね」

コーヒーを受け取って一口啜りながら優菜は力無く笑った。確かに抜けるように疲れていた。明日も早いし、早く家に帰って休みたい。だが、まだ今日提出分の、宿題のチェックがある。来週の授業の準備も。学級担任の仕事には終わりが無いのだ。

「それでも今週は何とか終わったじゃないか。向こうでは飲みに行こうとか言ってるよ」

決して無事とはいえない最初の一週間だったが、ベテランの学年主任曰く、「終いにはなんとかなって」ようやく金曜の放課後を迎える事ができたのだ。藤木の言う通り、低学年担当の教諭の間では飲みに行こうかという声も上がっていた。

「俺は行こうかと思ってるんだけど、羽山先生もどう？」

「私は……」

誘われるのは嬉しいが、本当に疲れ切っていて楽しめそうにない。どうしようかと思っていると藤木がにやりと笑った。

「いいんだよ、無理しなくても。へとへとなんだろう？又今度つて事で」

「……はい……そうします」

優菜は重ねて誘われなくて済んでほつとした。流石に教師の観察眼である。素直に助言に従う事にし、宿題のノートだけ持って帰る事にする。授業の準備は来週早く来て行う事にした。

「ありがとうございます。また……誘ってください」

「勿論」

優菜は酒は量は飲めないが、どちらかと言えば好きな方だ。だが、さほど親しくない複数の人間とワイワイ飲むのは苦手だった。今は昔と違って、付き合いも自分なりに学習し、テキトウな相槌もお愛想笑いも上手になったと思う。しかし、基本的に自分は社交辞令とか義理と言つものが苦手なのかもしれない。

「今日はもうお帰り？ 宿題のチェックなんて来週早くにやればいいさ。いい仕事するには元気なのがいいんだ」

藤木はそう言つて席に戻つて行つた。優菜は黙つて荷物をまとめ、教師は基本的に明るくなければ子ども達をひきつけられない仕事だから、子ども達の前では自然に明るく振舞える。好きな仕事だし。だけど、今日のように疲れきつていては、この上お愛想笑いはいまうまくできそうになかった。

ノートの束を包んで大振りのショルダーに放り込み、挨拶をして暮れなずむ戸外に出る。まだどうにか日の光が残っている。すぐに消えてしまつたろうけど。

すつと風が通つてゆく。春の歩みが今年は遅れていると朝のニュースで報じられていた。何時もなら満開の桜が今年はまだ七分咲

きというところだ。

「さむ・・・」

今日は駅前のスーパーでお惣菜でも買って帰ろう。湯豆腐もいいかな？ ゆっくりお風呂に浸かって寝て、持ち帰りの仕事は明日すればいいわ。

優菜は校舎の裏から自転車を引っ張り出し、校門を出た。一本道の正面の山際に夕陽がまだ引っ掛かっている。明日も晴れそうだ。

5・再会はトワイライトブルー 4

駅に程近い商店街。ここにはこの街で一番賑やかな場所だ。そして駅前出口で一番大きな店が、多目的酒店、「リカーショップ・トオキ」である。商店街の出口からほんの少しで駅前ロータリーに出るので、アーケードの中は買い物をする人や、通勤通学で駅へと向かう人たちが常に人通りがある。

最近、駅前ロータリーに面した所に中規模のスーパーやコンビニが出来て商店街の店主たちは商売敵が出来たと思っていたが、商店街には相変わらず地元の人たちが買い物にやって来る。そしてスーパーには新興住宅街の人が出向くようだから、これでなんとか均衡を保っているようだった。

そんな中でも志郎の店は常に客足が途絶えない。ここには酒だけでなく、飲料、調味料の類のほかに乾物、菓子など、生鮮食料品以外は大抵置いてあった。特に新しく始めた輸入物のチーズやワイン、ソースは品ぞろえが豊富で、都会のデパートまで行かずとも地元でしかも割安で購入できるとあって、地域を問わず若い女性達に好評だった。

冬木家の元々の家業の造り酒屋はいまだ健在で、祖父の代の人々が山手の店で頑張っている。しかし、ここ十数年の日本酒の需要は落ち込む一方で、江戸時代から代々続いた銘柄ではあったが、これ以上の事業拡大はまず無理と感じた志郎の父が20年前から商店街で小売業をはじめ、それが今の「リカーショップ・トオキ」なの

だった。駅前本店は四階建てで七年前に建てた持ちビルである。

商売は順調で、今では支店を近隣の町に数店舗持つまでになり、五年前には株式会社として発足した。そんな訳で、次男坊で都会の大学で気楽に全然毛色の違う分野を専攻していた志郎を卒業を期に地元呼び返したのだ。頭もよく顔も広い志郎に実地に営業や経営を学ばせながら、店の拡大を計ろうと、冬木家では考えたのである。

「ちょっと、何で勝手に決めるの！？ 前からご飯食べに行こうって言ってたじゃない！」

店の裏手にある小さな事務所に頼子の不満の音が響く。裏口の搬入スペースにはまだバイトの連中がいる筈だ。きつと聞かれているだろう。志郎は溜息をつくとデータを保存してからパソコンを落とした。

「言っただけ、言っただけ疲れてるから。県庁くんだりまでは行かない」

「だって、せっかく予約取ったのに。中々取れないんだよ？あの店」

「そお？」

志郎は頼子を適当になだめながら普段着のジャケットを羽織った。兄には休みを貰ったのだが、本当に疲れていて、頼子の言う、県庁の近くに出来たオシャレなフレンチレストランなどに行きたくなかった。どうせ、草食動物が食べるような見たこともない野菜がひとつまみと、ひとかけの肉が不自然に大きな皿に乗っかって出てくる

だけに決まっている。酒だって平凡なワインを馬鹿高い金を払って飲まされるだけだ。第一これから着替えて電車に乗るなんて真つ平である。と言つて車で行けば、それさえも飲めない。そんな男の心情が頼子にはわからないんだろうか？

つまらん。

志郎は思った。休日前ならいざ知らず、疲れきつた金曜の夜になんでそんなもん食わないといけないのか。第一まだまだ夜は冷えるのだ、こんな日は焼酎の湯割りに決まっている。肴は脂つくくて甘辛い、健康に悪そうなものがいい。この街の駅通りだって結構人通りはあるし、古いが旨い店だってある。

「ねえ、シロちゃんつてば！」

「そんなに行きたいんだつたら自分で行けよ。誘う友達ならいっぱいいるだろう？」

「私はシロちゃんと行きたくて予約取つたの！」

頼子は中々譲らない。よほど楽しみにしていたのだろう。志郎はうんざりしてきた。

やや明るめの茶髪の前髪をサイドから横にひっぱり、セミロングの巻き髪を今風にまとめた頼子は連れて歩いて見栄えのする女だった。まだ肌寒い四月はじめの宵だと言うのにヒップハングのダメージジーンズにきらきらしたベルトを二重に巻きつけている。トップはフリルの付いたシャツに、ボアの付いた短いサテンのダウンジャケットを引っ掛けている。

自分は冷たいんだろうか？およそ暖かそうとはいえない、都会風の装いに身を包んだ頼子をちらりと見て志郎は思った。

『冬木くん、私と付き合おうよ』

一年前、大学を卒業して家業を継ぐと決め地元に戻ってきた時、中学校の同窓会で再会した頼子にそう言われて、志郎は軽く「いいよ」、と言ったのだった。

ちょうど付き合っていた彼女とも別れたところだったし、流行の服をセンスよく着こなした頼子はとても見栄えがした。明るくて、よく笑い、彼女にするには申し分ない異性だった。事実付き合い始めた当初は楽しかったし、地元に残っている友人達からは羨ましがられたものだ。

だが、最近志郎は、そんな頼子の心に寄り添えない自分を自覚している。

このまま行けば確実に自分は頼子に掬すくい上げられてしまう。頼子の家も地元ではかなり大きく、分家だが、親戚は会社を持っており、両方の親もこの付き合いを好ましく思っている。頼子の親にはさすがに会ったことはないが、しょっちゅう遊びに來いと誘われているし、このまま行けば、頼子の敷いたレールに組み込まれ、結婚させられるのは確実だった。

頼子とはそんな風になりたくはない。ただ付き合って楽しければ

い。そう思うのは本気で愛していないからだ。学生時代に付き合ったどの女性ともこんな風だった。自分は冷たい人間なんだろうか？そんな風に考えると志郎はますます気が滅入った。

「わかったよ……じゃ行こう」

夕暮れの駅前通り。家路を急ぐ人々が通り過ぎる中、志郎は一人、心の底を寒くしていた。

ロータリーのスーパーは混んでいて、惣菜類も殆んど売り切れており、優菜は仕方なく、改札前のコンビニで弁当を買うことにした。これはあんまり使いたくない手段だったが、自分で作る気力が無かったのだからしょうがない。

ついでにちょっとおしゃれなデザートでも買おう。春の新作も出ている頃だろう。そう決めて、優菜は手ぶらでスーパーを出た。面倒なので自転車はスーパーの駐輪場に置いたままにする。コンビニはスーパーよりもさらに駅近にあり、ほぼ改札のまん前だ。この付近のコンビニはここだけだったから、いつも結構賑わっている。急がないと弁当がなくなるかもしれない。優菜は早足で歩き出した。

「あ、すみません」

自分の抱えた大きなバッグが、前に行くカップルの男性の腕にあ

たつてしまい、優菜は無意識に謝った。

「あ……おい！ ちょっと待って」

急に呼び止められて驚いた優菜はその顔のまま振り向いた。そこには背の高いがっしりした男性が、細い女性に腕を取られながら自分をじっと見つめていた。

「やっぱりそうだ……お前、羽山優菜だろ？」

6・再会はトワイライトブルー 5

頼子に腕を引かれて歩いていると、ぱすん、と志郎の腕に大きなシヨルダーバッグが当たり、長い髪の女性が急ぎ足に歩きながら謝った。

「あつ……すみません」

その時なぜ、彼女に気が付いたのか志郎は説明できない。

しかし、街灯に照らされた小さな背中を見たとき、志郎は何故だか確信に近い思いに突き動かされ、「待て」と声をかけたのだった。

通り過ぎようとしていたその女性が肩を竦め、髪をふわりと弾ませながら振り返るのを、まるでスローモーションでも見るように志郎は見ていた。間違いなかった。

「やっぱりそうだ……お前、羽山優菜だろ？」

「……え？」

優菜は突然自分の名を呼ばれて酷く混乱した。

この町に知り合いなどいない筈だ。十歳から十二歳までの二年余

りを過ごしたが、特に親しくしていた大人も子どももない。当時の同級生や近所の人は優菜のことなど覚えていないだろうし、実際優菜も誰のこととも思い出せなかった。勿論、彼女を呼び止めたこの大きな男性の顔も記憶に無い。

なのに、何故？

「……覚えてないんだな、その様子じゃ」

志郎は面白くなさそうに優菜を見つめた。少し波打つ長い髪。細い肢体におとなしい色合いのツインニットと黒いパンツという何処にでもいそうな若い女性。だが、彼女だと直ぐに分かった。記憶に残っている少し神秘的な雰囲気。

羽山優菜だ。

優菜も自分の目の前に立ちただかっている男性を不思議そうに見ている。コットンタートルのシャツにゴついジャケットを無造作にひっつけた長身の男。大きなベルトのバックルが自分の腰よりかなり高い位置で鈍く光っている。彫りの深い意志の強そうな瞳、今はやや顰められている、形のいい眉を。

なんで？ 名前を知ってるって事はもしかして昔の同級生？でも私、男子が苦手であんまり誰とも口をきいたりしなかった……

「……あ！？」

思わず小さな叫びが口から飛び出す。記憶の底からふいに湧き上がってきた思いがある。それは、ひどく苦い味を含んでいた。

「思い出した？　そう、俺。冬木志郎」

トウキシロウ？　トオキシロウだって！？　トオキ……

きつと優菜が嫌な顔をしたのだろう。まるで鏡に映したかのように目の前の男も険しい顔になった。

「……」

そうだ。その名には確かに覚えがあった。自分がこの町にいい思い出がなかったのは大部分、トウキシロウ（漢字は思い出せない）という嫌な男子生徒のおかげではなかったか？

「ちょっと、シロちゃん、誰？」

隣で不満そうな顔をしていた頼子が少し声を高めて聞いた。

「あ……ああ、お前覚えてない？　小学校の五、六年一緒のクラスだったろ？　確か……秋の修学旅行の直前に転校したんだったよな？　羽山……優菜サン」

名前のみならず、細かいところまで覚えている志郎に優菜は益々驚き、思わず僅かに半身を引いた。志郎はそんな優菜から目を逸らさない。

「ええ……？　そうだっけ？　ゴメン、私覚えてない」

思いがけない志郎の説明に、頼子は頼子は大きな目をまん丸にし

て優菜を見つめた。

「えつとあゝ六年の時って……」

「……」

優菜は非常にいたたまれない気分で突っ立っていたが、全に忘れ去っていた嘗てのクラスメイト達に取りあえず軽く会釈をした。だが、内心は早くこの場を立ち去りたい気持ちでいっぱいである。頼子は可愛らしく、小首を捻っている。

「思い出せないや……」

「……調子いいよな、俺等、寄ってたかってイジメてたんだぜ。羽山さんのこと、俺は覚えている」

「ええ、イジメえ？ 私そんなことしたかなあ……」

本当に思い出せないらしい頼子と、苛立ったように自分を見ている志郎。どちらも優菜にとって、何の関係もないし、どうでもいい存在の二人だった。ここ等が去り際だろう。

「……じゃ」

短く挨拶すると作り笑いで踵を返し、急いでいる風でコンビニへ向かう。一件落着。もう声などかけては来ないだろう。だが――

「待てって！」

えっ！？

さつきふいに名前を呼ばれた時よりも、もっと驚いて優菜は愕然と志郎を見上げた。がっしり腕を掴まれている。その力強さは軽い恐怖を優菜に呼び起こさせた。

なにこの力？　なんで……？

「羽山……さん、なんでこんなところにいんの？」

密かに慄く優奈を無視して志郎は一方的に話しかけてくる。

「……な、何って……」

「仕事？　そのなりじゃ仕事だよな？」

「え……ええ、まあ」

誤魔化そうにもその暇が無い。取りあえず頷いて見せたが志郎はまだ解放してはくれなかった。

「へえ、やっぱり。な、どこに勤めてんの？　それとも出張？　羽山、さん……よかったら教えてくれよ」

「……」

にこりともせず志郎が畳みかける。すごく言いにくそうにサン付けで呼ぶのもなんとなく気に触った。勤め先など言いたくない、言いたくはないが、目の前の男の様子は、適当にやり過ごせる雰囲気ではなかった。

「……く、葛ノ葉くすのは小学校……」

いかにもしぶしぶと言った様子で小さく優菜が答えた。

「え！？ それって俺等の出身校じゃん。あ！ ……ひょっとしてセンセイ？」

「あの……離して……腕」

「え？ あ……ああ、ゴメン」

慌てて志郎は優菜の腕を離れた。急に圧迫が無くなり、その開放感が優菜に自分を取り戻させた。

「悪いけど私、急いでいるの。ごめんなさい。じゃあ！」

今度こそ有無を言わず優菜は身を翻し、ひるがえ駅の方角に走った。

「なに？ アレ。感じ悪い人ねえ。シロちゃん、私、今の態度で少し思いついたかも。そういえば小学校の時、少しだけいて嫌われてた人、あの人だったような気がする。暗くて、アイソなくてみんな嫌ってた」

「……暗くてアイソなきや嫌うのかよ？」

志郎は苦り切って言った。

「そういう訳じゃないけど……あんまり良く覚えてないし……きっとネクラで変わった人だったんだよ。今もそんな感じだったし……そう言えば、シロちゃんだって率先してイジメてなかったっけ？」

「……」

頼子のその問いに悪意はない。しかし、それだけに志郎は自分のしたことを頼子にさえ覚えられていたのかと、言葉に詰まった。

「でしょ。まあいいじゃん。昔のことなんだし……あれ？　なんか小学校のセンセイとかって言ってなかった？　災難だね、子ども等も。あんな暗い先生でさ」

「……違う……俺は……」

何でこんなに動揺しているんだ！　俺は。

志郎は立ち止まったまま前を見据えている。人影にまぎれて優菜の姿は既に見えない。

「え？　何？　……って！　早く行かなきゃ、予約の時間ギリギリだよ！　私等も行こう！」

もどかしげに心を探り、自分の感情を見極めようとしている志郎に気づかず、頼子は明るく彼の腕をとった。

コンビニに駆け込むと、優菜は用もないのに一番奥の棚の後ろに行き、下の棚の商品を物色する振りをして屈みこんだ。

なんで、私がこんな……気まずい思いしなくちゃならないの？
別に悪いこともしてないのに……早くお弁当を買って帰りたいだけなのに……

訳もなく腹が立ち、こめかみがドキドキと脈打つ。さっきは狼狽のあまり思考が言葉の形を取らなかったが、今はふつつと沸いてくる嫌な感情をじっくり確認する事ができた。それは不愉快な感覚であった。

トウキシロウ……トウキシロウ……確か家がお金持ちで、いつも自信たっぷりで、私のことを馬鹿にしていた男子だ。クラスのリーダーで、なんでもできて、人気があつて、でも、根性の汚いやツだった。教会のクリスマス会でわざと私のケーキを落としたり……

忘れ去っていたとばかり思っていた苦い思い出が、自分でも不思議なくらいに次々と蘇る。

目の前をゆっくり滑り落ち、床にひしゃげてしまったケーキ。それを捨てた自分。みんなのひそひそ笑い。泣くのを堪えて走って帰った家路。

キライよ、大嫌い。あんな酷い奴。なんで今更私の前に現れるの！？

ここが屋外なら唾を吐きたいくらいの苦い味が口腔に広がるのを噛みしめながら、優菜はゆっくり立ち上がった。

だけでもう、どうだっていい。全部昔のこと。バカバカしい。何を動揺しているの？ 私は私だわ。どうせ、もう会うこともない。

冷蔵棚のドリンク類を眺める。好きなレモン味のスポーツドリンクを一つ手に取った。

……でも、本当にそうだろうか？ この小さな田舎町だ。まだ来て二週間もたっていないのに、もう同級生に出会ってしまった。この調子ではいつ何時、偶然に昔の知り人にばったり会うか、知れたものじゃない。しかもさっきは、ついucciかり、勤務先まで教えてしまった……。

この間、教頭に古い気質が残る土地柄だと注意されたばかりではないか。まさか、かつてのクラスメイトの全員がこの町に残っているわけではないだろうし、まだこの歳では自分が担当する小学生児童の保護者になってもいないだろうから、保護者としてまみえる訳でもない。そんなに気にすることではないかもしれないが、道端や、商店でばったり……なんて可能性は大いにある。現にちよつと金曜日の混みあふ駅前とはいえ、この始末だ。

しかも、自分は誰一人として顔を覚えていない自信がある。なのに向こうはあのトウキシロウのように物珍しさから、自分を覚えているかもしれないのだ。

「冗談じゃないわ」

気をつけよう。幸い校区に部屋を借りてはいないし、行き帰りは自転車で帽子を被れば誰だかすぐにはわからないわ。

優菜は弁当の棚のところに行つて不必要に時間をかけ、ゆつくりと選んだ。ついでに「新製品！」と書かれたスイーツも籠に入れ、レジを済ませた。そして、恐る恐るドアを押し開けると、そこにはもう彼等の影はなく、灯り始めた街灯の下を帰宅を急ぐ人たちが行き交っている。

既に夕焼けの最後の残り陽も消え、春の夜がゆつくりと始まろうとしていた。

7・チャコールグレーの心模様 1

頼子はベッドの中で昨夜の事を悶々^{はんずつ}と反芻^{はんずつ}していた。

晴れた土曜の昼前だと言うのに、今日は行く当てもない。志郎は今日も仕事だと言う。まあ、酒屋の仕事に土日はないんだろうけど、自分としては大変不満だ。一応店としての休みは木曜と言うことになっているが、実際には休みの日も志郎は飛び回っている。会ったしたら昨日のように、志郎の兄に許可を取って早めに上げてもらうか、よほど早くから予定しておかなくてはならない。

あれから電車に乗って、県庁近くにあるフレンチレストランへ行ったのはいいが、何を話かけても志郎は何か考え込んでおり、いつもよりさらに上の空だった。相槌を打つ振りすらせず、終始ぼんやりと、何を食べているかも気が付かないように、頼子は終いには話しかけることすら空しくなってしまうたのだ。

レストランを出て、このまま一緒に夜を過ごしてもいいと伝えたのに、志郎は明日も早くから仕事だと、食事を終え、頼子を送るとさっさと帰ってしまった。勿論別れ際のキスすらない。

ひどい……ひどすぎる……

頼子はきつくシーツを握った。しかし、いくら冷たくされても、

彼女は志郎が好きだった。小学校の時からずっと。

なんで……なんで私が、こんなにつれなくされなくっちゃいけないんだろう？ 腹が立つ……今まで男に冷たくされたことなんてなかったのに……アイツ、ひよっとして私に飽きた？ いやー！ そんなこと無いわ！ きつと忙しすぎて気持ちが悪く弱っているだけなのよ。私をもっと辛抱強くしなくちゃいけないんだ。

頼子は自分の考えに無理やり蓋をする。

そうよ！ 責任感の強いシロちゃんの事だから、仕事が忙しくなつて、責任感でストレス溜まってるのかもしれないし……プライド結構も高いし、あんまりしつこ過ぎない方がいいのかもしれない。それに意外と旧式なトコあるから、あんまり軽いと思われるような格好とか、言葉遣いとかしないほうがいいのかもしれない……

今までは東京の女をいっぱい見てきたヤツだからって少し派手目に振舞ってきたけど、ここらで軌道修正するかな？ ……まったくシロちゃん、アンタ難しいよ。でも、その内私をもっと好きにさせるから……。去年再会してから絶対コイツにするって決めてたんだから！ そんなに簡単に引いちゃうなんて絶対できない……！

頼子は勢いよく布団を剥いだ。ベッドの脇の棚には志郎と撮った写真が幾つか飾られている。その内の幾枚かは地元の古い友人達と一緒にだった。

当時小学校は二クラスしかなかったので、みんな一緒に感じが強かった。中学になると、地域のもう一つの小学校と同じ中学校の校区になり、当然クラスも増えたので二人の間は以前より遠のいた。それでも、体格が良くて、勉強もスポーツもできる彼は女子達の憧

れの存在で、頼子はなんとか彼の近くにしようとして、無理をして同じバスケット部に所属したり、委員会も一緒になったりした。

しかし、志郎は特に一人の女子と親しくするわけではなく、広い交友関係を楽しんでいたのも、頼子もせいぜい親しい女友達ぐらいの位置で満足するしかなかった。

その後、高校は別々になってしまい、更に志郎は首都圏の有名大学に進学したため、一旦頼子は志郎を諦め、高校の先輩や、バイト先で知り合った男の子と付き合ったりと適当に遊んでいた。そして親戚絡みの地元の中堅企業に就職して、大きな不満は無かったが、平凡な毎日だった。

だから、思いもかけず、地元に戻ってきた志郎と付き合えることになって、頼子は有頂天になっていたのだった。都会帰りで見栄えがし、金持ちの次男である志郎は自慢の彼氏だった。これはもう決めるしかない、そう思って付き合ってきたのに。

とり合えず、昨日志郎が上の空だったのは、駅前で会ったあの子のせいだ……でもなんで？

訳が分からない。

小学校の時、二年ほど一緒に六年の途中で転校してしまったという、同級生、羽山優菜。

実は昨日帰ってきてから、頼子は押し入れから卒業アルバムを引っ張り出してみたのだが、二学期の途中で転校してしまった彼女はぎりぎりでクラス写真に映ってはいなかった。修学旅行も一緒に行ってなかったから、スナップ写真すらない。かろうじて見つけた春

の校外学習の集合写真はひどく小さく、はつきりしない。無論親しく口をきいた覚えもない。

だけど……彼女は確かにいた。そしてあの志郎が頼子が驚くほどの執着を示したのだ。

そういえば確か、これ見よがしにきれいな髪をかき上げたりして、なんかみんなでムカつくとか言われてた子がいたっけ？ 雰囲気が都会っぽくって、クラスのみんなから浮いていたような……？ ぜんぜん明るい子とかじゃなかったし……。

でも、なんでそんな子の事を、ほんのちよつと見ただけでシロちゃん、すぐ思い出せたんだろう？ あの子自身だって言われるまで忘れていたようなのに……自分がイジメてたから覚えていたのかな？

きつと六年の時、何があつたんだろう。シロちゃんは人気者だったから、きつと皆が知らない所で。だけどそれだけじゃ……あんなに拘るかな？

頼子は珍しく考え込んだ。暫くしてから起き上がると枕元に放り出していた携帯を手に取り、小学校以来の友人を呼び出した。

「あ、なるみ？ 今いい？」

『いいけど何？』

「あのさあ、トートツなんだけど、小学校の時一緒だった羽山優菜ってコ、覚えてる？」

『ええ？ 何？ 誰って？』

「ごめん。でも思い出して欲しいんだ。なるみ、記憶力いいじゃん。羽山優菜だよ」

『ハヤマユウナ……』

電話口の友人は考え込んでいるようだった。

「うん、昨日偶然駅前で会っちゃってさあ……なんだか気になって……」

『へえ………そういえばいたかも。そんなコ。ちょっと名前が珍しいから思い出した。……でも、確かすぐ転校したような……』

「どんなコだったっけ？」

『さあ………目立たなくて……いや………目立ってたんかな？　なんか、ちよつと雰囲気が私等と違ってたような………だからかな？　結構シカトとかされてなかったかな』

「そうそう、暗いコだったよね？」

『暗いつつか、あの時分にみんなに無視されたら誰でも暗くなるって………実は私は嫌いじゃなかったんだよね、今思い出すと。………でも、なんでさ？　今頃』

「いや………だから、昨日偶然会っちゃって………なんか、ウチらの小学校に今いるんだって。センセなんだって」

『へえ………』

「でもなんか、感じ悪くてさあ」

頼子は声を尖らせた。

『ふうん。でも、珍しいね。ヨリが冬木君以外の話題で電話してるなんてさ』

「……そっかな」

『うん、どう？ 仲良くやってるんでしょ？ プロポーズはまだ？』

「何言ってるの、そんな話はしてないよ」今のところ」

『けど、ヨリは早く結婚した言ってるじゃない？』

「そうだけど……私らまだ二十三だよ。モット遊びたいよ」

『まーね。で、今日はヒマしてるの？ デートは？』

「なし。忙しいんだって」

『そ、でもいいよなあ。地元の名士どおしの付き合いだもん。前途洋洋だよね』

「そんなの関係ないよ。そうだ！ ヒマだったら、今日どこかで飯でも食べよっか？」

誰かにもっと話を聞いて貰いたくて、頼子は勢い込んで言った。

『へへへ、こっちはこれからデートなのだ』

「あ、そうなんだ、その内ゆっくり聞かせてよ。又連絡する。じゃあ」

つまらない！

頼子は携帯を脇に投げ出すと、もう一度ごろんと転がって毛布を引つかぶった。

7・チャコールグレーの心模様 1（後書き）

チャコールグレーとは少し暖色の入った灰色な感じで。

8・チャコールグレーの心模様 2

「志郎、これも発注するのか？」

伝票をめくりながら志郎の兄、悟郎が聞いた。

「なんだか、また最近名前の知らない外国の食品増えてないか？」

「ああ、なんだか、流行の酢だと。ダイエット効果があるそう最近、流行ってるんだそうだ。もともとネットから広がったらしいんだが、問い合わせが増えたんで、一遍入れてみようと思って。女言うことだから流行り廃りがあるんだろうけど、試してみようと思ったんだ。兄貴がいいなら」

パソコンに向かいながら、志郎が丁寧に説明した。はじめは親の事業を継ぐことに難色を示していた彼だったが、地元に戻ってきて一年、最近は自分の才覚で物や金や人を動かす事が面白くなってきたらしく、意欲的に働いて五歳上の兄を助けている。県一番の私立の進学校から、首都圏の大学に進んだ次男坊。親の金で学生をしていた頃は、勉強やスポーツはできるが、なんちゃって硬派で、苦勞知らずの生意気な男だった。なによりも自分が楽しむことが一番の関心ごとだったと悟郎は記憶している。

志郎は首都圏の企業に就職するつもりだったらしく、実家のことは兄に任せ切りでタマに帰ってきてても長居せず、両親と祖父に顔を見せると直ぐに都会に戻っていった。それでも一応経済を学んでい

るのだからと、ただの月給取りより、いずれ一つの店を任せるから地元やってみないかと説得したかいがあったと悟郎は思っている。

「な、どうかな？」

「まあ、こういう新しいモノのことは都会に行っただけのことあって、俺よりお前の方が詳しいからな。いいさ、何ケースか入れてみよう。……で、何か？ それはオンナ絡みの情報か？」

真面目一方の兄が珍しくニヤニヤ笑いながら、肩をどやしつけた。彼は既に妻を迎えて、一男の父となっている。

「こらバカ兄貴、ミスったじゃないか。……そんなじゃないよ。ほんとにお客さんから聞いてネットで調べたんだって」

「そうか。それはいいけど、オンナは大事にしろよ。今の彼女。田端んちのコだし」

「……それは兄貴に関係ない。そういう言われ方は嫌だ」

志郎はぶつきらばうにパソコンに向かって呟いた。やたらにカタカタとキィを打つ。

「悪い。それもそうだな。まあ……お前がちゃんと考えてやればいいさ。じゃあ、俺は国道店の方へ行ってくる」

悟郎は伝票を置いて、ぶらぶらと搬入口の方へ歩いていった。

「……」

兄が姿を消すやいなや志郎はキイドを打つ手を止め、大きなため息をついた。

なんで、みんな俺の将来を決めように言うのだろう？ 頼子も兄貴も。

つまらない。自分はまだなんにも固まってはいいのに。志郎はいらいらと冷えた茶を飲んだ。人口が増えても、この地域の旧弊さは昔と同じだった。志郎はどこに行っても冬木の坊ちゃんだねえ、とか、お家を継ぐなんてえらいね、とか言われるのだ。確かに、仕事は少し面白くなってきたが、四年も都会の空気を吸った身にはどこかしんどい、煩わしい部分もあることも否定できない。

アイツも、そんなことを感じていたんだろうか……？

羽山優菜。

子供の頃は、皆元気で素直に残酷だ。自分に理解できないものでも、しかも弱いものならばイジメるという事で排斥しようとした。勿論自分も。

どうしようもなく世間の狭い、卑怯モンのガキだったよな、俺。本当はもっとよく知りたくて知りたくて仕方がなかったくせに。

あの日の夕暮れ――

志郎は目を閉じた。

雨上がり。真っ赤に染まった空と山。冷え冷えとした早春の空気。空を映した畦道の水溜りよりも赤い長靴が、注意深くそれを避けてゆく。遠ざかる小さな背中。そして自転車さえ降りられず、黙って見送った自分。

この間の夕刻、小学校の校門に佇んでいた人影は間違いなく優菜だったのだ。そして、つい昨日再び出会ってしまった。全くの偶然で。

優菜は迷惑そうにしていた。志郎が名乗っても、はじめは思いだせない様子だった。あたりまえだ。ここで過ごした事は優菜にとつて、消し去りたい思いばかりだったのだから。自分だって長いこと思い出すこともなかったはずだ。ただほんの時折、鮮やかな夕焼け空を見る度にあの日の別れが頭をよぎるだけで……

だけど、又出会ってしまった。俺達は。

これはどういふことなんだろうな……今までは遠い思い出だったのに、今じゃ小学校に行けば確実にアイツがいるんだ。直ぐにでも手の届くところに。

志郎は自分が分からなくなっていた。そして分からないままにしておきたくないと感じている。このままでは何かが引つ掛かって、うまく収まりがつかない。彼は酷く落ち着かない心持で指の関節で机を弾いた。

『じゃ』と、身を翻し、逃げるように走っていった優菜。

俺はまたしても見送るしかなかったんだな。

長い髪はそのままだった。そして少し憂いのあるような目元はそのままに美しくなっていた。

なんとかもう一度会って、話をしなければ。昔の仕打ちを謝るにしても謝らないにしても、先ずは自分に目をとめて貰わなければ先には進めない。

だが――。

俺はそれでよくても、アイツはどう思うだろう？

志郎は呆然とディスプレイを見つめ続けていた。

9・チャコールグレーの心模様 3

歩みの遅かった今年の春も、来てしまえばあつという間に盛りとなる。開花が遅れていた桜は早や散り染めの風情で、枝の先端からは柔かい若葉が顔を覗かせていた。

「はぁ疲れた……」

ようやくその日最後の家を訪問し終えた優菜は、力無く自転車をこいだ。新学期恒例の家庭訪問週間である。二組の児童は三四人で四日間かけて全ての家を回るのだが、自転車しか持たない優菜にはそれはそれは大変な仕事だった。地区の地図帳を広げてみても、一面畑や川だけのページがあったり、そうかと思えば同じような戸建てが続いていたりする多様さだ。その上、旧街道などは細い上に曲がりくねっていて、土地勘のない者だったら辿っている内に方向さえ見失ってしまう。いくら子どもの頃に数年住んでいたと言っても、余り出歩いたことのなかった優菜にとっては初めての場所と変わりが無い。幾度か迷ってようやく国道まで出て来れたが、何と広い校区なのだろう、と優菜は感心した。家庭訪問期間中は午前中授業なのだが、時計を見ると既に勤務時間を過ぎてしまっている。

学校と家の往復だけだった子どもの頃は気がつかなかったけど……こんなにいろんな場所があったんだ。それにしてもこの二日間、で日に焼けてしまったわ。明日は帽子を持って出よう。

今日は主として元からの地の家を訪ねて回ったのだが、一軒一軒の距離がかなりあり、何度も地図で確かめなくてはならなかった。最後の訪問家庭は、校区の一番端だったので、学校には戻らず直帰すると届けていたが、それで助かった。学校からはかなり離れた場所だったのだ。この道を毎日歩いて通学していたら六年間でかなり体力がつくだろう。だが、優菜は既にへとへとだ。空腹でもあった。地図で確かめると、このまま国道を北に進んで右に折れたら商店街の南端に出れそうだ。そこを抜けたら駅は直ぐである。

それにしても――

今まで家庭訪問の経験は無いではなかったが、この校区は今まで務めたどこの校区とは違っていた。簡単に言えば、地の家と新興住宅地でその印象がかなり違っているのだ。

新任教師である優菜は、これが初めてクラスの児童の保護者と会う機会だった。新任という事で不安がる保護者もいるかもしれないと思い、充分下調べをして、話題を用意して臨んだのだが、実際に保護者に会ってみると殆どそれらは役に立たなかった。地元の家では否応なく座敷に上げられ、過分な茶菓の接待を受けたり、祖父母まで出てきて若い先生だねえと感心されたが、新興住宅の家では玄関先で母親と話をする事がほとんどだった。話題も学習や進学に関する事が多く、クラスでの役割等を離しても余りのつて来ない場合もあった。

どちらがいいとか、悪いとか言えないんだろうけど……

とにかくひたすら疲れた。余程気を張っていたのだろう。しかもこれで終わりではない。明日も明後日も続くのだ。とにかく早く帰

ろつと、優菜はひたすらペダルを漕いだ。二キロほど進むとようやく市場の明かりが見えてくる。

商店街は夕飯の買い物客はそろそろ少なくなってきたが、それでも途切れることなく人が行き交っている。流石に自転車では通り抜けられないので、優菜は下りて歩くことにした。田舎の町にしてはかなり大きな商店街で、定食屋や暮会所などもあり、地元の良きコミュニティとなっているようだ。優菜のクラスにはいないが、ここの商店主の家の子も学年に数人はいる筈だ。

誰に見られているかもしれないから、ここではまだ先生の顔をしないでなくっちゃ。

優菜は自転車を押しながらそんな事を考えていた。物珍しく店を眺めながら北へと進んでゆき、商店街の出口近くで目に入ったものは――。

「なにこれ」

優菜は思わず声に出して呟いていた。

リカーショップトオキ。

アーケードの出口にある大きな酒屋。明るい店内からはみ出すようにおかれた商品の数々。内から外から客の出入りが多い。店と言っても最早小さなビルと言ってもいい規模で、アーケードの端からは三階建て以上の建物が見出ている。小売業の商店の間でひときわ目立つ、大きなカタカナの看板の下の方には小さく漢字で冬木酒

店と書いてあった。

トオキ……トオキって、冬木！？

これはもしかしたら、少し前にこの先のロータリーで出会った、あのトオキシロウという同級生だった男の名字ではないか？ そう言えば家は酒屋だと聞いたような気もする。優菜は思わず明るく看板を見つめていた。彼女の記憶の中では、駅前に商店街があった事は覚えていたが、こんな大きな酒屋は存在していなかった。そう言えば店もまだ新しいようだ。

酒屋と言っても、酒類は中の方にあるらしく、店先には特売品と思われる、菓子類や普通の飲料のケースが大量に置かれている。レジも一つだけではないようだ。

こんな大きな店の息子だったんだ……

どう言いつ訳か、優菜はトウキシロウがこの店の身内であると確信していた。店は繁盛しているらしく、まとめ買いをした主婦達が大量の荷物で出てくるのを店員が愛想よく送り出している。それらをぼんやり見ていると、奥の方から見間違えのような大柄な男が、段ボールを抱えて出てくるのが見えた。

店先に置いた商品を補充しようと、志郎は倉庫から荷物を運び出した。店は一番忙しい時間帯を過ぎたからこれでやっと一息つけるだろう。後はバイトで何とかなる筈だから、志郎は事務所に戻って

明日の配達の確認や工場への発注の作業に戻る。レジには二人の客が並んでいるので、反対側の棚の影から店先に出ると、彼女がいた。

目が合う。

羽山優菜は驚いていた。自転車を手で持って立っている。見覚えのあるショルダーバッグが前カゴからはみ出していた。相変わらず地味な服装で、長い髪を後ろでまとめている。志郎は一瞬でそれら全てを見取った。

「お……」

掛けようとした言葉は、露骨な嫌悪の表情に押し留められてしまった。目が合った途端、優菜は顔を顰め、さっと自転車に乗って駅の方へ走り去ってしまったのだ。荷物を抱えたままの店先では、何もしようがない。志郎は抱えていた段ボールを下ろした。

そうか、そう言う事か……。

ジャンパーからカッターナイフを取り出すとのろのろと箱を開ける。

目に入れるのすら嫌ってことか？

志郎を見て驚いていたと言う事は、優菜がここが彼の店だとは知らなかったのだと知れる。彼女がこの街にいた頃にこの店はまだ出来ていなかったから、知らないのも無理はない。小学校から駅までの最短距離の道筋の中に商店街は入らないので、普段はアーケードの下を通る事はないのだろう。今日は何かの用事でたまたまここを

通り掛り、偶然この店を、そして志郎を見てしまったと言うところだろう。

余程俺を嫌っているんだな。無理もないか……。

商品を陳列棚に並べながら志郎は思った。子どもの頃のいじめというものは、それをした方は忘れていても、された方の傷はなかなか言えないと言われるが、正にその通りだったと言う訳だ。目があつた瞬間の強張つた頬と、歪んだ唇。それは紛れもない厭いやの感情の噴出で、それがまっすぐ志郎の胸に突き刺さつたのだ。

ばさばさばさ

手から取り落とした商品が床に散らばる。バイト達が驚いたように目を向けた。

くそっ！ 何でこんなに堪こたえているんだ、俺は。

商品を拾い上げながら、心が鉛を飲みこんだように重くなつていくのを志郎は意識していた。

だが、それでも――。

このままにしていはいけないのだった。

志郎にとつても、優菜にとつても。

10・チャコールグレーの心模様 4

春はどんどん過ぎ去る。

めきめきと木々は萌え立ち、昼間は半袖でないと暑いくらいの季節になった。

あわただしく始まった新学期も少しずつ落ち着いてきている。

水曜日は週の半ばということで、優菜は比較的楽な時間割を組んでいる。一時間目は国語、二・三時間目は生活総合科、四時間目は体育、そして給食があつて五時間目は学級活動、主に生活総合科で学習したことを話し合ったりまとめたりする。生活総合科、略して生活科は葛ノ葉小学校の場合、学級、もしくは学年単位でいろいろな活動をする事になっている。授業内容は学年会議で検討され、校外に出る事もある。

その日の生活科の学習内容は、「自分たちの住む地域の産業を知ろう、体験しよう」というテーマだった。五年生ではこのテーマで一カ月計画の単元学習を立ち上げていて、最後の仕上げに実際に職業体験をする予定になっている。これは葛ノ葉小の五年生でここ数年春に実施している活動である。

今日はその単元の一時間目。

自分たちの町にはどんな産業があるのかを調べて、どんな風に自分に関わっているかを出し合つのがテーマだ。

他都市から通っている者も多い教師達に比べて、地元民たる児童たちは地域の事情に個々に詳しいはずだ。だが改めて授業で質問されると分からなくなるのが子どもなのである。産業と言われても、最初は何を答えたらいいのか戸惑う様子だったが「じゃあ、お父さんやお母さんのお仕事を言いあってみたら？」という優菜の問いをきっかけに、ぽつぽつと手が上がり始めた。その殆どは産業というより職業だったが、次第に分かり始めた子ども達から、その仕事が自分の生活のどんな所に役立っているか活発に意見が出てきた。

「僕の父さんは隣の町の農協に勤めてるよ」

「じゃあ、俺の親父とどっかで会ってるかもな、ウチ農家だもんね」

「あたしのママはスーパーのバックヤードってところ。パートだけど」

「バックヤードって何？」

「裏方さん」

「せんせえ、パートも産業に入るんかなあ」

「うーん、産業の元を支える存在かなあ。でも大事な仕事だよな」

質問したのは横山君だ。そんな質問は予想していなかった優菜は焦りながらも取りあえず無難に返事をした。全く意表をついてくれ

る。これだから、授業は気が抜けない。だが、子どもとのやり取りは楽しかった。

これまで優菜はこの科目の展開が苦手だったが、児童たちに主導権を与えた今回の授業はなかなかいい感じにまとまってきたと優菜は感じた。

キュキュキュ、とチヨークが鳴り、書記役の進藤さんと言う女子がなかなか上手な文字で黒板を埋めてゆく。三分の二ぐらい埋まったところで、優菜はそろそろまとめようと立ち上がった。

「ずいぶん意見がでたね。進藤さん、ご苦労さま。席に戻っていいですよ」

仕事とその役割を並列して書かれた板書をざっと見渡してみると

農家、お米作りなど・・・毎日の食事のざいりようになる
養鶏・・・卵をつくっている

農協・・・農家の仕事を後押しする、ちよ金も出来る
スーパー、いろいろな者売っている・・・毎日の買い物
車のエンジンヤ・・・車を安全に走らせたり修理をする
家やビルを設計者・・・自分たちの住む家や学校などを建てる

会社でお金の計算をしている・・・その会社の家族が生活
するお金を分ける

公務員・・・街の管理をして住みやすくする
いろいろな物の配達をしている・・・宅配便など

大きく分けて生産的なものとサービス業的なものに分かれる傾向があった。概ね、地元の子どもの意見は前者、新興住宅地の子ども

は後者に分かれるのも興味深い。

「……じゃあ、次は一度体験してみたい産業って何かな？ 議長の田村君、順番に聞いてみてくれる？ 進藤さん今度はノートに記録してね。今まで出た以外のものでもいいからね」

これも比較的すんなり手が上がり、記録をとったところで授業が終った。これを元に児童が体験できそうな職種をピックアップし、職員で授業に協力してもらえそうな所に依頼する。少し大変そうだが、去年もおとしも同じ学習をやっているの、ある程度は地域の人たちにも協力してもらえ、既に地元の農家や商店からも協力の申し出もある。しかし、新しく希望の出た職種で児童が出来るようなものには、校長名で依頼状を出さなければならない。体験学習とは下準備がなかなか面倒なのだ。

でも、結構盛り上がってきたわ。新学期で浮足立っていた子ども達が共通の目標をもってきた感じがする。

優菜は、体験学習が少し楽しみになってきた。児童が興味を持ち始めた事が、授業の手ごたえから伝わってきたからだ。

余り突拍子もない職種は無いし、明日の学年会議で早速報告しなくっちゃ。

優菜は四時間目の体育に備えていそいそと教室を出た。更衣室でジャージに着替え、運動場に出ると既に体育係りがヤカンに水を入れ、ドッジボールのコートの線を引いている。今日は男女混合で行うと言っていたので、みんな早くやりたいと協力的に整列していた。黄色っぱいグラウンドに半袖の体操服が眩しい。

準備体操とランニングを終え、いよいよゲームの開始である。

ピーッ！ 優菜の笛の合図で2チームに分かれ、ゲームが始まった。

ドッジボールは子ども達が好きで、週に一度はねだられて行っている。一学期の終わりにはクラスマッチもあり、ほとんどの子どもが生き生きと取り組む活動だ。

大きな体格の子はきついボールを放るが的にもなりやすく、何回もコートを出たり入ったりしている。すばやく逃げ回る小さな女子もいる。みんなすぐに汗みずくになり、大声を上げていた。小学生だった頃、当てようと狙われもせず、ボールを積極的に拾いに言ったこともない優菜は始めのうちそれが不思議だった。

「おい！ ワンバン（ワンバウンド）は関係ないだろ？ 陣地に残れ！」

「ええっ、ほんまにワンバンか？」

夢中な声が運動場を飛び交う。コートのことを陣地と言う習慣は昔からのものだった。

ドッジボールは制限時間内にどれだけ自分たちのコートに味方が残っているかで勝敗をきそう。勿論味方が全部当てられてコートの外に出たら、そこでゲームセットだ。AチームとBチームで2試合したが、両方ともBチームの勝ちになった。2回ともAチームの子が全員当てられてしまったのだ。

「せんせえ、不公平よ」

Aチームのリーダーの大澤さんが不満そうに言いだした。

「なんで？」

「だって、ウチ一人休んでいるし、向こうはウマイ横山君がいるんだよ？」

「そうそう！ もう一人入れてよ。」

大体こういう発言をするのは女子が多い。徒党を組むと途端に強気になる。

「何だよ、この前の学級会で公平にチームを決めたじゃん」

Bチームの男子が負けじと応じる。

「だって、一人休むとは思わないもん。それも結構うまい杉ちゃんだし。誰かこっちのチームに来てよ。もう一試合できる時間じゃん」

「そうだけど……誰かチーム移るやつおる？」

横山君が自分のチームに問いかける。だが、ええ、とBチームのメンバーからは不満の声が上がった。圧倒的に勝っているチームから移動するのは誰だっていやだろう。だが、このままではAチームの子たちも納得しそうに無い。優菜はちょっと困ってしまった。

「……じゃあ、先生こっち来てよ！」

Aチームの安藤さんが声を上げた。

「ええ？」

「そうだ！ それならいいよ！」

「せんせえ入って！」

今まで不満を漏らしていたAチームの女子が優菜の腕を掴んで群がる。

「ええ、でも先生あんまり上手じゃないよ？」

「いいっていいって！ 数のうちだから！」

あまり嬉しくないお言葉と共に優菜はAチームのコートに引つ張っていかれた。Bチームの子ども達も面白そうな成り行きに笑いさざめきながら、早く試合を始めたくて自分たちのコートに入った。審判は無しでもいい雰囲気になる。

しょうがないなあ・・・

しかたなく優菜はAチームに加担してゲームに参加することにした。勿論今までにもドッジボールをやった経験はあるが、この学校では初めてだ。みんな都会の学校の子ども達より運動ができる。投げるボールは結構威力があって侮れない。

そして試合が始まった。

Bチームはさすがに強い。横山くんは的確に狙った的に鋭い当て

てくる。外しても勢いのあるボールは向かい側の味方に拾われて速攻で投げ返され、なかなかいいコンビネーションで攻めてくる為、Aチームのメンバーはどんどん減っていった。

優菜は小五にしては大柄な横山くんとほとんど同じ背丈しかないが、それでも女子の中では大きくて目立ち、よく狙われた。しかし、学生時代少しやっていたバドミントンのおかげでフットワークがすばやく、逃げることは上手だった。

「せんせゝ、ずりいゝ、逃げてばつかじゃなかゝ」

三度目にかわされた横山君が笑いながら文句を言う。

「いや、逃げるのも作戦よ？　ねえ？」

すっかり楽しくなってきた優菜は数少ないメンバーに訴えた。そうだそうだとこちらにも負けじと声が上がった。

「さあみんなあと少し。斉藤君、ボール取ってね！　反撃しよう」

いつの間にか優菜もびっしりと汗をかいていた。

運動場の向こうの道に白い軽トラックが停まっている。立ち木に遮られて運動場からはよく見えないところだ。

志郎は車を降りて、木陰からネット越しに歓声の上がっている方

を眺めた。

体育の授業なのだろう。子ども達が大声を上げて走り回っている。その中で優菜が生き生きと動き回っていた。白いＴシャツに紺のジヤージ。後ろで一つにまとめた髪がぴんぴん跳ねまわり、小柄なその姿は、子供たちの中に紛れ、彼女が先生だと知らなければ指導者だと思えない。

なんだ……あいつ、逃げてばかりじゃないか。ヘタクソだなあ……。

優菜のこんな姿を見るのは意外だった。

勿論同級生だったところにも体育でドッジボールはやったはずだし、志郎はいつもリーダーだった。チーム分けも率先して行った。しかし、思い返してみても、そこに優菜の印象はない。

きつとうまく立ち回っていつも逃げてばかりだったんだろうさ。

しかし、今の優菜は同じように逃げてばかりでもちゃんと相手のほうを見てボールの行方を追っている。うまくボールを受けた子に指示を出してまるでそのチームのリーダー役のようだった。勿論指導者なのだから当然なのだが、積極的にゲームを楽しんでいる印象を受けた。

「ワアッ!」「ヤッターッ!」「パス!パス!」

ひととき大きな歓声が上がった。優菜が終に大柄な男子の放った

ボールを受けたのだ。頬が真っ赤に紅潮している。すぐに優菜は自分のチームの投げ手の男子にボールをパスした。腕がぐんと振られ、汗が飛び散ったのか空気が煌いている。

パスを受けた男子はすばやくボールを放って、終にクラスで一番大柄でリーダーだと思われる男子の足先にボールを当てる事ができた。

「ウワァー!」「横山が当たったー!」「センサー、ナイスアシスト!」

子ども達が口々に叫び、優菜も両手をあげて近くの子どもと対ハイタッチをしている。これで残ったメンバーは両チーム同数となり、一気に盛り上がったところでチャイムが鳴った。

時間から見て次は給食の時間だろう。残念そうに後片付けをするのは何も子ども達だけではなかった。

残念だったな……羽山……最後のボールはナイスだったけどな。

志郎はこっそり呟き、配達途中だったトラックに乗り込む。エンジンをかけて、フェンス越しに最後に運動場に目をやると、子ども達に囲まれた優菜が校舎に入っていくところだった。

二日後――

沈痛な面持ちで午後の駅前通りを歩く優菜がいた。

学年会議の結果、新しく候補に挙げた体験学習の商店主に依頼をしに行く役目を仰せつかってしまったのだ。

優菜は溜息をついて手にしたプリントを見つめた。幾つかの商店の名の一番下。そこには「リカーショップ冬木」と示してあった。

11・チャコールグレーの心模様 5

さてと……いよいよここだわ。

優菜は駅前のロータリーの端に立ち、少し先にある商店街を覗きこんで呟いた。商店街の一番忙しい夕食時を避けて来たので、既に春の日はとつぷり暮れている。

体験学習の最後の依頼商店、「リカーショップ冬木」。

この間、家庭訪問の帰りに偶然ここを通りかかった優菜は、店先に出てきた志郎とばったり出くわしてしまったのだ。その時は動揺の余り、逃げるように立ち去ってしまった。あの時のことを思い出すと余りに大人気なくて恥ずかしい。校区内にある駅前商店街の事として、これからだって通りかかるかも知れないのだ。いくら苦手な人物だからと言って、逃げ出すのは社会人として無礼だろう。せめて会釈くらいはすべきだったと反省している。

まあ、でもあの時偶々たまたまいたからと言って、彼が又店にいるとは限らないし、たとえいたとしても私は地域の小学校の代表としてビジネスライクに対応すればいいんだから……

優菜は訳もなく胸を張った。だがしかし、そうは思いつつ、少し離れた場所から店先を窺う自分に嫌気がさす。これではまるで不審者ではないか。

何も恐がることはないと自分に言い聞かせ——その実、言い聞

かせなくてはならないと言う事は、実は二の足を踏んでいることの証ではないかと言う、自分への突っ込みにはきっちり蓋をし、意を決して顔を上げると優菜はつかつかと店に入ってしまった。

「ごめん下さい。私、葛ノ葉小学校から参りました」

レジの店員に名のり用件を話すと、奥にいる社長に言ってくれという事だった。それは予定していたことだったので、奥にある小さなドアに掲げてある「関係者以外立ち入り禁止」のプレートのあるドアを開けて入ってしまった。おそらく事務所なのだろう。「社長」というのが志郎の兄である事はすでに調べていたから、優菜は我知らず肩の力が抜ける。

よかった、あの人は留守なのだわ。

ドアの奥は矢張り小さな事務室で、八畳ほどの空間だった。壁の一面は全てアングル棚で、沢山のファイルやカタログがぎっしりと並んでいる所は、学校の職員室と変わりがない。壁際に置かれた三台の大きな事務机にはそれぞれ最新型のパソコンが置いてあり、様々な伝票やメモがコルクのボードに貼り付けられている。

奥の方にさらにドアがあり、そちらはおそらくは倉庫に繋がっているであろうと思われた。そこは薄く開けたままになっている。

優菜が入って云っても事務室には初め誰もいなかったが、奥のドアの外で携帯の鳴る音が聞こえた。優菜がぎくりと身構えると、間もなく奥の扉が開き、二人の男性が入ってきた。中背の青年と、少し頭の薄い壮年の男性が。

「あ、いらっしやい。えーと小学校の先生で？」

「はい。羽山と申します」

優菜はほっとした。話しかけたのは落ち着いた感じのする若い方の男性で、顔が似ていることから、この人物が聞いていた社長で、志郎の兄と思われた。もう一人年配の男性は単なる社員か関係者で、ちよつとこの部屋に用があつただけらしく、青年に一言二言言つた後、優菜に会釈をすると店の方へ出て行つてしまつた。

誰だつていい。相手が志郎でないのなら、こちらも構えずに話ができると言つものだ、と優菜は目に見えてリラックスしている自分を感じる。

「お忙しいところ申し訳ないのですが、先日お話した生活体験学習の件でお願いに上がりました」

「はいはい、話は伺っていますよ。私はこの店のオーナーで冬木悟郎といえます。はい、名刺……あ、失礼、ちよつと待つて」

突然鳴り出した無遠慮な携帯の音にどきりとするが、商売の時間中に邪魔をしているのは自分なのだから、仕方がないと優菜は大人しく待つた。

「なんだ、お前か……え？ああ、うん……いるよ？それがどうした？……え！？十分待つて！？何だよそれは？俺が言うのか？……ああ、ああ、分かつた。まあいい、とにかく早く戻れ」

携帯をポケットにねじ込むと、悟郎は優菜に済みませんねと頭を下げた。その笑顔はいい印象を優菜に与えたが、電話の内容に優菜は不安になる。電話を受けながら優菜をちらり見たことも気になつ

た。ここはさつさと切り上げた方がよさそうだ。

「ええ、商店街の会長から話はきいています。小学校の生徒さんを半日受け入れたらいいんですよ？ 確か一昨年あたりから、この商店街で行っているとか」

「はい。体験学習です。組合長さんにはさっきお会いしてきました。今年もできるだけ協力してくださるとのお言葉を頂いて……」

「ええ、うちも是非協力させていただきます。なんたって私も、弟も葛ノ葉小学校の出身ですからね」

悟朗は鷹揚に笑った。感じのいい頬笑みだ。同じ兄弟でもこんなに印象が違うのだと、妙なところで優菜は感心した。

「あ、ありがとうございます。授業の実施日は五月の二八日で、こちらには四人の児童が伺う予定です」

「男の子ですか？」

「男女二人ずつです」

「うちは酒屋だから、商品は重いものもあるけれど、力仕事なんかもさせていいんですか？」

「はい大丈夫です。ただ、万一の事があってはいけないから、割れ物や高価な商品には触れさせないようにしてください」

「成程、なかなか氣を使いますね」

「申し訳ありません」

「いや、僕の事ではなく、先生の事を言っただですよ。子供たちの管理と言っのは大変そうだ」

悟朗は理解ある微笑みを優菜に向けた。それはとても感じのいい笑顔だった。似たような顔の男を知っているが、その人物が笑ったのは見た事がない。

……何をどうでもいい事考えてるの、私。さっさとお話を済ませて引き上げないと

優菜は自分の思いを打ちきって頭を仕事用に切り替える。

「管理と言うか……対応ですけれど。もし児童たちの態度で目に余るような事があつたら、少々叱って頂いても構いません。保護者にもそのようにお話をさせて頂いているので」

「ははは、そうですか？ 子どもを叱るのは見慣れているんですが……僕の弟も相当な悪ガキだったんですけどね、よく親に叱られてまして……」

ええ、そうでしょうとも！

優菜は内心、大きく頷いたが、余り悠長に話していただくはなかった。だが、と言う訳か忙しいはずの悟朗は世間話になだれ込みそんな気配である。さっきの電話で十分待てとか言っていたのが、気になったので、優菜は急ぐ振りをしてバッグからプリントを取り出した。

「お時間頂きましてありがとうございます。詳しい資料はもう少し日が接近したら、持って上がりますので……これは学校の授業計画です……何卒よろしくお願いいたします」

一気にまくし立て、深くお辞儀をすると優菜はそそくさとその場を後にしようとした。

その途端、表のドアが勢いよく開く。さっきの電話からまだ5分も経っていないはずだが、目の前には優菜が最も会いたくない人物が立っていた。

「よう……」

志郎はドアを塞ぐように突っ立って優菜を見据えると短く声を掛けた。

「あ、こ……こんにちわ。あの……それでは社長さん、よろしくお願ひします。私はこれで……」

優菜は志郎を見ずにぺこりと頭を下げた。それから振り返り、不思議そうにこちらを見ている悟郎にもう一度深々とお辞儀をすると、志郎の横をすり抜けようとした。

が、志郎はドアの前を退こうとしなかった。体の大きな彼がドアの前に立ち塞がっていると外に出られない。優菜はどうしても顔を上げられなくて、目の前のブルーのシャツを見つめた。

「なんだよ。もう帰っちまうのか？ なにか学校に協力しろって話

じゃあなかったのかい？ 羽山さん」

「あ……その件は社長さんにお話をして許可を頂きまして、今お礼を申し上げていたところです。なので私はこれで失れ……」

「待てよ」

立ちふさがる志郎の後ろに回ろうとした二の腕ががちりと掴まれる。この前と同じように。優菜はぎょっとして身を竦めた。

「……なんでしょうか？」

反射的に腕を振り解いて優菜は志郎を見上げて問う。近くに立てるとふり仰がなくてはならないほどの身長差が恨めしかった。

「もう五時過ぎたぜ……勤務時間は済んだろう？ 少し話さないか。……羽山さん」

「なんだ、お前、この先生と知り合いか？ さっきも何やら言ってたようだけど……」

悟郎が二人の間に流れる微妙な空気を気にしながら弟に尋ねた。

「ああ、そうだ。俺たちは同級生さ。羽山さんは昔ここに住んでいた。一緒のクラスだったよなあ」

片眉を上げてこちらを見る志郎に、優菜はとりあえず曖昧な笑いを浮かべて頷くしかない。悟郎は驚いたようだが、すぐに納得したようだった。

「へええ、そうなんですか」

「ええまあ……でも私、学校に戻らなくてはいけないので……失礼します」

きつぱりとそう伝える。無論嘘だが上出来だ。これでもうしつこく絡まれることもないだろう。しかし、志郎は気軽に頷いた。

「ああ、そうか。じゃあ送ってやるよ。軽トラだけだな。悪い兄貴、ちよつと行ってくるわ」

「ああ、大丈夫だ。しっかりセンセイをお送りして来い」

壁のキーボックスから車のカギを取り外した志郎に、悟朗は上機嫌で頷いた。

12・茜色の道の上

なんでこんなことになっているんだろう？

軽トラックのベンチシートに志郎と並んで座りながら、優菜の周りには疑問符が飛び交っていた。

ちらりと横で運転する志郎を見ても、彼は精悍な横顔を見せて夕暮れの国道をまっすぐ見つめ運転しているばかりで。

さっきは話さないか、といったはずなのに一言も口をきかない。優菜も特に話題はない。当たり前だ。十年も前にほんの数年一緒のクラスで、しかも仲が良かった——どころか、はつきり言って苛められて大きらいだった同級生に、今更なんの話があるう？

「正門前でいいのか？」

優菜が考え込んでいる間に短いドライブは終わり、トラックは小学校へと続く道を走っていた。

「あ、いえ、ここで……」

志郎は軽く頷き、正門の少し手前で車を停めた。正門前などんでもない、万が一同僚に見とがめられてて妙に勘ぐられては非常に不本意だ。この間話す事も無く黙りこくってたくらいの薄いつなが

りなのだから。優菜はもごもごと礼を言うにあたふたとトラックを飛び降りた。

そのまま正門から校内に駆け込む。かなり日が長くなった今日の頃だが、流石に六時前だと昼とは言えない。職員室に戻ると、残っている職員は既に半分くらいになっていた。本当はあのまま駅から直接帰る予定で、そのように段取りをしていたから既に残った仕事もなく、手持無沙汰でなんとも情けない気分になる。学年主任の永嶋や藤木の姿も無い。彼等も矢張り別の地区で体験学習依頼で頭を下げて回っているのだ。この分ではおそらく直帰するのだろう。話し相手もない。しかたなく、優菜は十分ほど無理やりファイルの整理をして過ごした。

せっかくあのまま帰れたのに、学校に戻るとウソついて。しかもトオキシロウを振りきれずに車で送ってもらって……私一体何やってるんだろう？ もういいよね。あの人だって仕事があるんだからとつくに帰っただろうし。いいや……帰ろう。

「あら羽山先生、今日は五年は体験学習の依頼だって言ってなかった？ わざわざ帰って来たの」

「あ……ちょっと……」

声を掛けてくる同僚に忘れ物をしてきた振りをしてごまかすと、優菜は再び校舎を出た。校門を出た所でくるとあたりを見渡しても白い軽トラックの影はない。

あたりまえか。

優菜はジャケットの裾を引っ張った。陽気は暖かく、直ぐに上着

も要らなるだろう。門からまっすぐ伸びる道を足早に歩き始める。
今日は商店街を回る予定だったから自転車に乗って来なかったのだが、駅までは早足で十分の距離だ。同じ道を引き返すのはバカバカしいが仕方が無い。溜息をついて優菜が歩き始めた時――。

「よう、もう終わりか？」

「きゃあ！」

近くの家の玄関からぬつと大きな影が出てきて優菜は肝を潰した。

「きゃあつて……俺はお化けか……けど、わるい。驚かせちゃったようだな。いや、何。ここん家はお客さんちの家でさ、ここまで来たついでに御用聞きをしてたんだ。今終わった」

見れば広いその家の駐車場に軽トラックが止まっている。優菜は泣きたくなった。一体何の為に小芝居まで打ったのだろう。情けなくてどつと疲労が押し寄せてきた。

「送るよ」

「いりません」

「……じゃあ、言い方を変える。送らせてくれ」

「……なぜでしょう？」

優菜はすっかり落ち込んでいる自分を悟られまいと、必死になつて足を踏ん張り、きつと志郎を睨みつけた。

「なぜって、何が？」

「私のことなんて放っておけばいいじゃないですか！ どうして構うんですか？」

「……っ」

大きな瞳に溢れんばかりの感情が滾^{たぎ}っている。志郎は唇を引き結んでそれを真正面から受けた。受け止めなくてはならないのだ。

「あなたと私は、別に友達でもなんでもないでしょう？」

「……確かに」

門の灯に顔の半分を照らされながら志郎は言った。優菜の言葉は真実だ。彼女にとって自分は友達なんかじゃない。今までは。

「……けど、なれねえかな？」

「なりたくないです」

「……キツいな」

一刹那考えることすらせず、言い放たれた言葉に志郎は足元に視線を落とした。

「無理ですから」

「……」

「俺を嫌うのももつともな話だけだな。だけでもう少しだけ話したいんだ。……乗れよ」

嫌だと言おうとしたその時、門扉近くでの会話が聞こえたのか、ガラリと脇戸を開けてこの家の主婦がげげんそくに顔を出した。

「なんですか？」

「いえっ……済みません」

揉めていると思われるのはならない。自分は直ぐ傍の小学校の教師なのだから。優菜は作り笑顔で会釈し、門から足早に立ち去る。志郎もすぐに営業用の表情を作った。

「あ、すみません。ここではったり友達に会っちゃって、つい話しかんじやって。ご注文ありがとうございます。これで失礼しますんで……なっ？」

そう言つと、志郎は前に行く優菜の腕を強引に取って軽トラックに放り込んだ。そのまま自分も乗り込み、エンジンをかけると、あつという間に一本道に乗り入れる。そのままトラックは妙にゆっくりとした速度で駅へと走り出した。

「なっ！ 何するんですか！？」

「……この道はそんなに変わんねえだろ？ 舗装されただけで」

優菜の抗議に応えず志郎は前を見ている。少し先の駅とその周囲の街のずっと向う、真正面に見える山々の稜線は暮れはじめた空を背景に濃い青に見える。それを見ながら志郎は呟いた。

「この道覚えているか？」

「さあ？」

優菜の返事は残酷なほど短い。尋ねた者の気持ちを打ち砕くように。だが――

どう言う訳か、優菜はこの道をよく覚えていた。小学校の正門から西に向かつてまっすぐ伸びるこの道を。あの頃はまだ地道で雨が降る度、轍わたちに大きな水溜りが出来たものだった

「そうか。昔はもつと広がったんだが……今は田んぼがどんどん住宅地になつてな……」

そう。優菜も覚えている。学校が終わると子ども達は皆、正門からこの道に飛び出し、笑いさざめきながら友だちと並んで帰るのだ。自分にはそんな思い出はない。いつも一人で家路を辿った道だった。面白くも無い。あの頃の苦々しい思い出は全てこの男に繋がっている。

「いつからこんなに家が増えたんだろう。毎日見るとわからなくなるな？」

「……」

優菜は頑固に前だけを見ていた。もう直きのんびりとした春の陽も落ちて、宵闇が辺りを包むだろう。

「うん、この辺りだったか？」

のろのろと進んでいたトラックが停まった。すばやく運転席から飛び降りた志郎が、そのままぐるりと回って助手席のドアを開ける。

「降りて」

「え？」

ドアを開けて覗きこむ志郎に驚いて優菜は身を引いた。だが、腕を取られるとするりと引っ張り下ろされてしまう。

「済まん。でも降りて見てみ？」

訳が分からないまま、優菜は辺りを見渡した。

その辺りは並んでいた住宅が切れて広々とした空間が広がる、一帯だった。道の両側は一面の田んぼ。もうすぐ田植えが行われる筈だが今はまだ田起こしの時期なのだろう。水が張られた田んぼに、暮れてゆく空が映っている。

「ここは……？」

「俺達が別れた場所だ」

「……え？」

思いもかけない言葉に優菜は、はっと志郎を見た。がっちりと目が合う。

「そっだここだ。用水路の名残があるからな。ここで昔、俺たちは

別れた。だからここからやり直すしかないんだ」

「……」

言葉も無く優菜は志郎を見つめる。落ちかかる夕陽を受けて志郎の顔の影が濃い。

「昔、俺のやった事、許される事じゃないって分かってる。許して欲しいと言う資格もねえ。現にお前は逆毛を立てた猫みたいに俺を警戒してるしな」

「……」

妙な例え方をされたが、なかなか当たっていると思つた。この男の言う事など何も聞きたくは無かつたし、何を聞いても信用できない。

「だから今は謝らない。例え謝つたつてお前は受け入れてくれるとは思えねえし……」

「お前……?」

さつきから何度もそう呼ばれている。耳障りだ。あんななんかにお前呼ばわりされたくないと言う意味を込めて、優菜は短く言い返した。

「悪い……羽山さん」

志郎は素直に言いなおした。

「あの頃はみんなどうしようもなくガキで、その中でも俺は特に鼻持ちならない嫌なガキだった。お……羽山さんの事苛めてた」

「……」

「俺は忘れてない。ずっと自分の中に重い物を抱え込んだ。あれから色んな事があつたけど……どこにいても夕焼け空を見る度、妙に鮮やかに思い出すんだ。ここで最後にあつた日の事、何度も繰り返し返して」

「最後……?」

志郎とこの地で最後にあつた日……それは――

「ああ、そうだ。羽山さんが転校する前の日だった。俺はこの道の上で完膚^{かんぷ}なきまでにやり込められたっけ」

「ええっ!」

優菜は思わず声を上げた。

「そんなことしてない! 冬木君がサボリとか言ってくるから……もう私は関係ないんだって……そう言っただけよ! 皆して無視していたくせに、学校を休んだぐらいで……」

優菜はしまったと言う顔をした。つい喋り過ぎてしまったのだ。これではまるで乗せられてしまったも同然ではないか。

「覚えていたんだな……」

「！」

志郎も驚いていた。そんな小さな言葉まで優菜が覚えているとは思わなかったのだ。

「やっと俺の名前を呼んだな」

唇の端を少し上げて志郎は笑った。

「……」

悔しくて眼を逸らす。覚えていたのが悔しくて。ずっと忘れてはいなかった。長い間記憶の底にしまっていた、あの日。雨上がりのすばらしい夕焼け空、まっすぐ伸びる泥んこの一本道、自転車の少年と交わした言葉を。

「あの時、お前は俺の前をすりりとすり抜けて、そのまま学校に戻ってこなかった。俺は本当は……」

言いよどむ志郎の眉根が一瞬深い皺を刻み、平らになった。

「だから……すごい時間が経ちまったけど、あん時言いそびれた言葉を今言いたいんだ」

「言葉？」

「学校に来いよ。そう言いたかった。戻って来て欲しかった。ずっとそう思ってた」

「……」

「だけど、お前……羽山は帰ってきた。奇しくも学校に戻って来たんだ」

「ここに来たのは辞令が下りたからです。自分の意思ではないわ」

「うん、そうだろうな。分かってる。けど、俺は……だから……」

取り付く島の無い冷たい態度は相手の気持ちを挫いてしまうようだ。だが志郎は引くつもりは無かった。

「……うん、うまく言えねえんだけど。許してくれなくってもいいんだ、自分の気を済ます為にこんな事やってるわけじゃないし……でも、こんな事、お前が言うのかって羽山は怒るだろうけど……」

志郎は一步前に出た。

「許さなくてもいい。……けど、頼むから無視しないでくれ」

「無視？」

「この間、俺と目があつた途端、ゴキブリでも見たみたいに逃げてつただろ？」

ゴキブリとは流石に思わなかったが、確かにあの時本能的に優菜は逃げた。後になって社会人として良くない態度だったと反省はしたが。

「昔散々苛めやらかshいて、今更何言っただと自分でも思う。だけど、今言つとかないとすげえ後悔しそうだから」

「……」

「時々でいい。俺を視界に入れてくれ。頼む。何なら罵ってくれたっていいんだ。無視しないでくれさえしたら……」

「……何でそんな事言っんですか？」

「実は俺にもよく分からないんだ。……けど、無視して欲しくないんだ」

「別に……」

あの時逃げてしまったのだって、無視した訳じゃない。ただ目を合わせるのが嫌だったただけだ。この男の光の強い目が自分を射ぬくのが嫌なのだ。多分、昔から――

だが――

それは拘りこたわと言っものではないか？

優菜は考えている。

冬木志郎の事は確かに嫌いだが、逃げ出したりすると言っ事は、いつまでも過去の出来事に自分が囚われていると言っ事だ。目の前の男の呪縛に縛られていると言っ事に他ならない。自分はその事を認めたくなくて逃げ出したのだ。志郎の方は単純に無視されたと思っっているらしいが、その実拘こたわっているのは自分の方ではないのか？あの駅前での再会以来、常に胸の奥の方がいらいと落ち着かない。だが、そんな事ではいけないのだ。折角教師になれたのだから、

腹蔵なく職務に専念しなくてはならない。こんな所で引つかかっている場合ではない。今の自分は、何の弱みも無い大人なのだから。

「……あの時の事は……」

「うん」

志郎は優菜の言葉を待っている。いつの間にかすっかり辺りは暗くなっていた。

「すみませんでした。変な態度をとってしまつて」

「……」

「これからだつてお世話になるのに、大人気なかつたと思つています。おっしゃる通り、これからは社会人として普通に接していきたいと思います」

「ありがたい」

「だけど……やっぱりあなたの事は好きになれません。許すとか、許さないとかじゃなくて、子どもの頃の嫌な思いは胸に刺さつたままだから」

「ああ……分かつてる」

「でも、あなたがあの時のこと覚えていたなんて思つてもいなかったから、それはびっくりしたけど……」

まさか、こんな場所に連れて来られるとは思つてはいなかった。

その上、自分を無視しないでくれと乞われるように言われるとも…
…。この尊大な男が。

「ただあの時の事はこれ以上話したくない。取りあえずは今度の体験学習の件、宜しくお願いします」

優菜は出来るだけ冷たくそう言って頭を下げた。

「それでいいよ」

顔を上げると志郎が少し笑っている。目尻に皺の寄った笑い顔は少し切なそうで優菜は少しだけ悪い様な気がした。

「うん……それでいい。遅くしちまって悪かったな。……帰ろうか？」

「……」

帰ろうか——志郎はとても自然な風にそう言った。嘗て誰とも一緒に帰った事が無かったこの道。なのに今、優菜は昔一番嫌いだっ
た少年と帰り道を共にしようとしている。あの日ほどではないが今日も夕映えが空を覆い、辺りを暖かく染め上げている。

どうして——どうしてこんな事に……

優菜は途方に暮れていた。

髪を揺らす晩春の風はぬるい。そこには一筋の艶やかさが含まれている事に、優菜はまだ気づいてはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8580x/>

茜色の君に恋をする

2011年11月26日20時55分発行